

319

319-478



1200501375637

良書百選

日本圖書館協會編
第一輯



始



良書百選

第一輯

社団法人 日本圖書館協會編

219-478

序

日本図書館協会は昭和六年七月以來文部省援助の下に社會教育會と協力して、社會教育上裨益するところある優良圖書の推薦を行つて來た。本協會はそれがために特に調査部を設け、調査委員十三名をあげて新刊圖書に就き調査に當らしめ毎月一回定期に調査委員會を開いて慎重審議の上推薦したるものを、社會教育會の發行にかかる「社會教育」附録「讀書」頁に發表して一般社會人に良書を推奨し、圖書選擇の利便に供して來たのである。本推薦はまた特に調査委員會選定のものの中から毎回目ぼしいものを名士に依頼して紹介の筆をとつて貰ふことを方針として來た。今後も同様である。幸に本協會の精神は認められ、本事業が各方面より多大の歡迎を受けて來たことは、我々の私かに意を強うするところである。本協會は更に一層利用者の便益を圖るために、良書百種を精選して綜合目錄を刊行し、その坐右に備へることを企てたのである。幸にこれがまた世の迎ふるところとならんことを望んで止まない。

昭和七年五月

社団法人 日本図書館協合理事長

松本喜一



例言

- 一、本輯は昭和六年七月より昭和七年三月までに本協會が推薦した良書百種の綜合目録である。
- 一、推薦圖書は昭和六年一月以降出版されたものに屬してゐる。
- 一、本目録は各圖書の要旨を批判的に紹介してゐるのが特色である。その中特に名士の執筆に成るものが五種ある。
- 一、本目録は日本圖書館協會の分類に準據し、百種を八部門に分類してゐる。
- 一、卷末には各部門の書名索引を載せてゐる。



良書

百選

第一 哲學・宗教・倫理

プラトン

ベーター著
内館忠蔵譯

人々の知る如く、プラトンは古代希臘に於ける偉大なる哲學者であると共に勝れたる詩人であつた。西洋思想の淵源が殆んど彼に基くと云はれてゐる程に、彼の思想は爾來二千年間絶えず歐羅巴思想界の根柢を流れ、何等かの意味に於て之を支配して來た彼の思想が其後の西歐文明に對して如何に根強く活き如何に深い影響を與へてゐるかは全く吾々の想像以上である。従つて苟も西洋思想、西洋文明を云々し之を理解せんと欲する人々にとつてはプラトンは實に忘るべからざる人であらう。

本書は十九世紀の有名な英國の文藝批評家ウオルター・ペーターが若い學生達のためにプラトンの人物とその學說とを全般的に講述したものであるが、親しい文章と犀利な洞察

とは讀者を不知不識の中にプラトンの思想にひきつけそれに親しみを覚えしめる。

内容は「プラトンと運動論」「プラトンと靜止論」「プラトンとソクラテス」「プラトンとソフィスト」「プラトンの天才」「プラトンの學說」「ラケダイモン」「國家」「プラトンの美學」の十章から成つてゐる。併してその論述は哲學的體系的な研究といふより寧ろ歴史的考察に基く文藝的描寫であつて、純粹な哲學者には物足らぬかも知れないが、プラトンの思想を中心とする當時の希臘の社會や哲人プラトンの人となり等を如實に描出して居るから一般の人々には却つて興味あるものであらう。譯文も平明流暢であつてプラトンの思想の大意を掴むには手頃な良書であるから、我が國の若い文學者哲學者等にプラトン入門書として一讀を薦める。

(昭六、二、一一) 理想社 四六判三三〇頁 定價二・二〇

【推薦昭七・二】



朝永博士還曆記念
哲學論文集

「近世に於ける私の自覚史」カントの平和論「デカート」等幾多の名著を公にし、我が學界に不朽の業績をのこして大學教授の職を去つてゆく朝永三十郎博士！その圓滿な人格とその懇切な教化とを徳として、博士の知友門弟達が相集つて博士の還曆祝賀のために美しい一つの哲學的饗宴を開いた！これが本書の意味である。

いまその内容に一瞥を與ふれば、先づ第一に西田幾太郎博士の「人間學」がある。近頃流行の哲學的「人間學」を批判し、單なる外的、歴史的「人間學」を排して内的人間の自省の學としての「人間學」を強調して居るのであるが、如何にも老大成せる哲學者といふ感が強く、高遠な思想を極めて平明に叙説したものであるから、ひとは之によつて「西田哲學」の一斑を窺ひ知り得るのみならず、眞の哲學的思索の精神を汲みとることが出来るであらう。次に波多野博士の「實在するものとしての神」はアイデアリズムの哲學はその究竟に於て宗教の領域に入らざる可らざる所以を説いたもの、田邊博士の「綜合と超越」はハイデッガーの所説を批判して、博士獨特の「觀念實在論」を明快に叙べたもの、又高田博士の「社會學的史觀について」はエンゲルス唯物史觀を論駁して、博士の所謂第

三史觀を主張せるもの、菊地氏の「宗教的目的論と其止揚」は大乗佛教の思想を以て、至聖ソクラテスの精神を解明せるものである。

其他和辻教授の「佛教哲學に於ける法の概念と空の辯證法」長田教授の「生命教育學」、勝部教授の「死の哲學」、土田杏村氏の「マルクスに於ける唯物論の限界」、以下二十有餘の論文は、何れも、哲學、宗教、心理、教育、社會、佛教、美學等の各領域に於ける最近研究の最高峰を示すものであるから、斯學に志す人が、輒近の我が學界の状況を概観して、其諸傾向を知るためには至極適當な良書である。尙哲學的訓練を受けてゐない人にとつては、多少専門的で可なりむづかしい點もあるではあらうが、熟讀玩味すれば、各自の人生觀、社會觀の上に必ずや得る所が尠くないであらう。

(昭六、四、三〇 岩波書店 菊判九九一頁六・〇〇)【推薦昭六、八】

現象學
高橋里美著

現代世界の哲學界に對してフツセルの現象學ほど大きい波紋とすばらしい影響とを與へたものはあるまい。純正哲學の領域に於ては勿論、道德、宗教、社會、藝術、教育、法律等の文化諸領域に於ても此の研究方法が基礎となつて、現に著々と多くの新しい業績を擧げつつあることを思ふならば、ひと

は此の學問が如何に重要なものであるかを悟るであらう。

本書は親しくフツセルに師事した高橋教授が、その講義や演習や又彼との個人的會話などで得た知識を土臺とし、彼の多くの著書を參考としてその學說一般をできるだけ平易に叙説したものである。包容する四論文中、第一の「フツセルの現象學」は本書の主要部分を占める組織研究であつて、現象學全般を特に現象學的還元を中心を置いて要領よく紹介したものであり、第二の「批判論と現象學」と第三の「分析と綜合」とは之を補足すべき簡單な論述と見做される。最後の「フツセルの事」は「フツセルの印象記」ともいふべきものであつて、フツセルの眞面目な研究態度やその熱心な教授、演習の有様などがよく偲ばれ、一介の勞働者たるに甘んじて、黙々として地味な研究をつづけてゆく彼の學者的人格にまのあたり接する思ひがする。

以上、本書はフツセルの現象學を出来るだけ平易に、そして又正確に叙説したものであるから一般の人々が現象學の概念を掴むには極く手頃な信頼すべき入門書と云へる。

(昭六、七、一五 第一書房 國際型一二六頁 一・五〇)

【推薦昭六、一〇】

聖書物語

ヴァン・ルーン著
前田 晃 譯

著者ヘンドリック・ヴァン・ルーンは和蘭の生れで米國及獨

逸に學んだ文明史家である。ニューベリー賞を受けたその前著「人類史」は、數年前同じ譯者に依つて「世界文明史物語」の譯名の下に早稲田大學出版部から出版せられて、我國に於ても相當の讀者と好評を獲て居る。本書はその姉妹篇で、前者が人類の歴史を縦に貫いて見せたのに對し、本書を通じて人類の精神の發展を物語らうとして居る。然るが故に本書の書名には特に「人間の魂の歴史」と傍題されてある。

取扱ひ方は徹頭徹尾聖書に終始して新舊約聖書を單純化し聖書の全輪廓を浮き出させる事に努めたもので、決して聖書を書き改めたものでも新解釋を施したものでないものであるから、所謂聖書物語の様に單に興味ある挿話をお話式に書き改めたものとは少しく譯が違ふ。

英米の讀書界に於て本書の獲た評判の一般は「いかなる種類の宗教的偏見にも片寄らない、そして美しく單純化された言葉で綴られた物語であつて、聖書學徒に非常な助けを與へるであらう」と云ふのであるが、一方又教會の長老連からは、本書のキリスト復活に關する取扱が疎である事が批評に上つてゐると云ふ。

元來が本書は中學中級以上の少年の爲に書かれたもので、云ふ迄もなく舊約全書は天地の創造から始まつて沙漠の民の一種族が西アジアの一角に自分達の國を建設する迄の物語であり、新約の方は、ナザレの村の大作で、何ものをも人生から求めずに、すべてを與へた一人の人の人を中心とした物語であ

る。で、本書もそれに従つてイエスの死と、二人の偉大な使徒パウロとペテロの命を賭しての傳道と教會の確立に筆を止めてゐる。尙殆ど毎頁に挿入された挿繪は原著者自身の手になるものである。

今や聖書が、一ユダヤ民族の生活記録としてではなく、一切の人類にとつての貴い寶典となつてゐる限り、世の少年少女諸君に、そして又キリスト教に一回も好意を寄せた事のないかつた大人に、本書の一讀を是非すゝめ度い。

佛陀の言葉

友 松 圓 譯

本書は佛說法句經の現代語譯である。本經は二十六節四百二十三詩よりなる小經文であるが、釋尊在世中縁に隨ひ機に應じて出家在家の弟子等のため説けるものを、滅後に會誦し、爾來師資口受し、西紀前第一世紀中に巴利語を以て現在の形に筆録せられたものであるといふ。

その内容は、一雙の教訓、不放逸、精神、花、愚、賢、聖者、眞の價値、あしき行爲、刀杖、老、自己、世界、佛陀、幸福、愛、怒り、けがれ、正義に立脚するもの、道、地獄、象、愛慾、修行者、波羅門等の諸節よりなり、言々句句佛陀の人間らしい言葉を以て綴られて居る。然も後世に發展せる佛陀思想の

あるを會得せざる一知半解の徒なりと言はざるを得ない。本書は正に此の積極的方面に於ける著者の卓見を整理したるものである。

第一篇「佛敎の基礎的概念」の項に於ては、佛敎的活動の原理たる佛敎思想の特質と其の史的發展の概要を述べこれに文化的解釋を施して居る。

第二篇「菩薩道より見たる人生の意義」第三篇「菩薩道と淨土」の二編は佛陀乃至佛敎の人生觀、道德觀、政治觀、世界觀を述べたものである。

佛敎の厭世觀は決して現實逃避を教ふるものではなくして寧ろ世界の眞相を苦と觀じて而も勇敢に其の苦を征服する工夫を體驗せしめんとするにある事を述べ、更にその淨土思想は決して愚夫愚婦を誑惑する所の妄誕ではなくして、永遠的生命を把握せる個々の完成すべき理想郷の提示である事を力説して居る。

されば佛敎の教ふる所は正に人生、社會、國家の方向を示すものであり、かゝる聖業に欣然參加する闘士にして且つ求道者たる菩薩を養成せんとするものであることを理解しなければならぬ。

第四篇「自省と修養」は菩薩としての修養を述べたもので單なる處世訓とは其の選を異にし、自己を救済し、國家社會の柱石たるの信念を鼓吹せんとするものである。

尙第一篇には佛敎研究の方法とその方針とを説述されて居

多くはこの小經典に萌して居るから、これによつて一面、根本佛敎所説の一斑を知ることを得せしめ、他面、佛典を難讀難解のものと思惟する人々にこの上もない親しみを與へるであらう。

本經の韻譯は英譯を別として、一八五五年フアウスバールのラテン語譯を始めとして英佛獨の各國語に翻譯せられ廣く西歐に流傳した。我國に於ても明治三十九年以來常盤、萩原立花氏等の翻譯があるが何れも學究専門の徒の爲めに原意を先としたもので譯文晦澁の嫌がある。本書は既刊譯本を比較し更に巴利原典と對照し、専ら通俗を旨として譯出し、所々に註解を施してゐるから佛敎への入門書として役立つであらう。

(昭六、七、二五 甲子社 四六判 一八七頁 〇・六〇)【推薦昭七、二】

佛敎概論

木村 泰賢 著

「眞空より妙有へ」の改題、本書は前著「解脫への道」の姉妹篇である。前著は専ら佛敎の向上的方面を説いて現實否定の過程を明にし、本書はその活動的方面を示し、現實を指導する原理を導き出さんと試みたものである。

佛敎を目し超世的、厭世的宗教なりとなすものは、かの解脫の消極的方面のみを見て、未だこの現實指導の積極的活計

るが、其の識見の該博なる佛學の徒を裨益する所又大なるものがある。

惜むらくは印刷粗漏にして脱字尠からず、由つて讀者は寧ろ初版「眞空より妙有へ」を購讀せらるゝがよ。

(昭六、八、三一 甲子社 四六判 四三〇頁 一・五〇)【推薦昭六、二】

佛敎の根本思想

高楠 順次 著

本書は高遠なる佛敎を、平易な言葉で以て、而も組織的に講述して、佛敎の大衆化をはからんとする意圖のもとになされた講演の速記である。

釋尊の生涯を叙することは本書の主目的ではないから、極めて簡略に其の概要を語られて居るに過ぎないが、其の教説に至つては次の五項に分つて懇説されて居る。

佛敎以前の印度思想——佛敎の根本思想を理解せんとするものは、これと佛敎以前の印度の傳統的思想との相違を知らなければならぬ。

次に佛陀金口の諸説は悉く其の體驗より進み出たものであるけれども、又當時の思想を否定することは出来なかつたしまた其の必要もなかつた。故に第二章に於ては佛敎の繼承せる古教説について述べられて居る。

佛陀は極力哲學の爲めの哲學を斥けられたが、其の完成せ

られたる哲學は誠に印度哲學の王座に位するものであつた。第三章は佛陀によつて完成せられたる諸教説をあげ、第四章には佛敎の根本教義として四法印を叙べて居る。

後世三國の衆生を化導せる佛敎の根本思想は眞にこの四法印に他ならない。現存せる我國の十三宗三十有餘派、その要諦は正にこの四法印にありと言はなければならぬ。

第五章は根本佛敎の組織とその教化への貢獻を物語るもので、讀者は意外なる暗示を獲得するであらう。

大要右の如く佛敎に就いての常識を得んと欲するの士は一讀すべき好内容である。惜むらくは相當誤植の多いことであるが、書肆は第十版の爲めに其の訂正を急ぎつゝありといふ。

(昭六、四、一七 大雄閣 四六判二四三頁・六〇)【推薦昭六、八】

日本思想史概説

田中義能著

歐米思想の一般國民に取入れられつゝある今日ひるがへつて日本固有の思想を闡明する事は又國民としての義務であらう。上古より日本固有の思想の中に斷乎として存するものは敬神の觀念であるが、一度外來思想の入り來るや、儒敎は直ちに日本固有の思想に融合せられ佛敎は國民の要求に應ずる様に變ぜられ又最近外來思想も着々日本化されつゝあるのであるが本書に於て良く其間の思想變遷の跡を知り得やう。

本書に於ける著者の念願は日本固有の思想に對して充分なる認識を有せしめ自主的態度を以て外來思想を批判的に觀察せしめんとするにある。平易簡潔に日本思想の體系を説き得たものとして本書を推薦する。

(昭七、二、一四日本學術研究會 菊二一四頁二・五〇)【推薦昭七、三】

上代文學に現れた

日本精神

野村八良著

我が國體の精華、古言古道の研究の對象が、かなり多く古文献として現存して吾等後裔に傳へられてゐる。著者は國初以來奈良朝の末迄の範圍で我民族の間に發源し次第に其實質が整ひつゝ發展して來た日本精神が如何なる性質で如何に繼承せられたのであるかを文献に基いて考案し吟味して行くのである。

先づ第一章序論に於ては、「上代文學一般」と題して、古典の性質を述べ「國語の特性と上代文學」では、兩者の關係交渉を述べ、次に「古史神話の特性」に於ては、先住民より大陸文化の影響に至る迄の上代史を略述する等主として基礎的問題を取扱ふのである。

次に本論として取扱ふ所は本書の中核であつて「上代人の生活及び風習」に於て、上代人の生活及び風習を各方面より述べ、續いて「上代文學に現れたる日本の諸觀念」と題して

之を細目に分けて詳述するのである。

最後に餘論として、中古時代並に武家時代文學上に現はれたる日本精神を略述し、かくして古今を貫いて日本精神の如何なるものであるかを明かにするのであつて、現代人に國民的自覺を促すに足る良書である。

(昭六、一〇、五大岡山書店 四六判二五一頁二・〇〇)【推薦昭七、二】

やまとこころと

獨乙

精神

鹿子木貞信著

九大教授、鹿子木博士が所謂「精神史學的方法論」に基いて、吾々のやまとこころとゲルマン民族の獨乙精神とを通俗平易に論述した痛快な讀み物である。第一章の「やまとこころ」は著者が「やまとこころ」は、哲學的に沈潜し、之を認識把握して、その現實性と可能性とを組織的全般的に解明したものであり、次に第二章の「やまとこころのおひたち」は、日本精神の發達を歴史的に叙述し、これが闡明に努めたもので前章の補足とも見られる。最後に第三章の「獨乙精神」はやまとこころに酷似せる獨乙精神を叙述したものであるが、著者が屢々獨乙國に遊んで、或は古聖賢の書に親しみ或は彼の地の多くの人々に接してその家庭生活社會生活などを見聞し、仔細に研究した體験を基礎としただけであつて、獨乙精神の特色とその機構とをよく傳へて居るやうである。

藤樹先生の學徳

松本義徳編

本書は藤樹先生の徳を慕ふ者が先生の故山なる近江の小川村に集ひ、第二回史蹟巡禮講座藤樹書院夏季求道會なるものを催した折の講演集である。

江西の邊陲に隱者の如き生活を送りながら其の徳化普く全土に及ぶの状は、宛がら聖者の面影を偲ばしむるものがある。近江聖人藤樹については幾多の文献が存するのであるが、本書はよく簡明に先生の學徳と其の思想とを記述し、讀者をして先生の生涯を窺知せしむるに足るものである。

其の内容を見るに藤樹先生の學徳、藤樹先生の生涯と著作報本反始について、藤樹先生の思想、藤樹先生の遺蹟と遺品、藤樹先生の眞蹟に就て、藤樹先生の大洲辭任に就て、等の題目のもとに西晋一郎、加藤盛一、高橋俊乘、小川喜代藏の諸

氏が講演せるものを本書に編纂せるもので尙卷末に藤樹先生の年譜が附してある。

藤樹の學説は廣汎にして其の何れに重點をおくかを論ずるは又容易ならざるも、之を要するに先生は孝を以て「生天生地生人生萬物只此孝」と説き、故山に歸つて母に仕へ孝養至らざるなきは正に自ら此の學に終始せられしものと言ふべきであらう。

藤樹を慕ふ人、新に先生の學徳に關心を抱く人々、ならびに我教育にたづさはる人々が本書を読んで必らずや裨益せられるところがあらう。

(昭六、六、四 渾沌社 四六判三〇〇頁 一・五〇)【推薦昭六、九】

支那哲學思想叢書

新 觀

論 語

山口 察 常 著

本書に於て特に新觀の二字を冠した事に就ては、卷頭所掲の本叢書編纂趣旨の中に斯うある。

「所謂新しいものが果して眞に新しいものであるであらうか最も古いものが却て最も新しいものであり得ないだらうか何れにしても此の思想混亂の時に在つては、少くとも自分の有つもの否自分自らをもつと仔細に見つめて見る必要はないか、(中略)古いと云つて顧みない思想系統の中に、今も新しい眞理は横はつて居ないか、所詮東洋人たる吾々は今少しく

東洋其れ自身に就いて見直してみなくてはならぬ。」

諸本書の内容であるが、是は決して所謂論語の解説註釋の書ではない。年少の頃より論語の句讀を受けられ今日に至つた著者が、論語一巻を縦觀して獲られた孔子教學を、要領を掴んで叙述されたものである。従つて章の設け方も論語そのものとは些かの關係もない。即序説に於ては春秋時代の社會相孔子の評傳、その弟子及後繼者等につき述べ本論に至つて孔教の中心をなす仁、社會統制の原理としての禮、家庭人たるの道、社會人たる道としての信等につき、又君臣論、政治説、教育論等々凡そ此處に設けられたる十一の章程面白く、考へさせられるものはない。

正しく「古いと言つて顧みない思想系統の中に、今も新しい眞理は横はつて居ないか」と云ふ本叢書編纂趣旨中の言葉は新奇を追ふ現代人に對して、何と快い警告の言葉ではあるまいか。剛毅木訥は仁に近し、巧言令色は鮮やかな仁等、平生耳なれ、口なれて、既に陳腐の中に追ひ込まれた言葉でも靜かに考ふる時誰か私に顔を赤らめないうで居られようか。我等は一度古賢の言葉に聞かなければならない。時代は寧ろ夫を要求する。本書の出現は誠に時を得たものと云へよう。尙引用された論語はすべて斯文會發行の國譯論語により、漢文の原形は一切用ひてない。又著者は現在東京高等學校教授である。

(昭六、一、二、五三省堂 四六判二六二頁 一・二〇)【推薦昭七、一】

字野哲人 著

新觀大學・中庸

内野 泰 嶺 著

新 觀 孟 子

先に本會の推薦せる新觀論語と合して支那哲學思想叢書の四書を形づくるものである。

四書は儒教の經典中最も我國人に愛讀せられ、又よく我國民思想を啓培し來つたものである。然も昔に過去に於てしかありしのみならず、又永久に國民思想の經典として常に座右に備へ以つて其の徳操の涵養に資する所がなくてはならぬ。

惜むらくは或は難解であり或は斷片的であつて、よく一篇の大意を把握するには多大の忍耐を必要としたのである。

然るにこの新觀に於ては序論に於て各書の名義、著者の略傳、學統、四書相互間の關係を説き次に本論に入つて居る。大學の本論に於ては三綱目及び八條目を平明に解説し、次には古來大學の中核として最も論議された致知格物、慎獨潔矩の道、人君の法、義利の辨をなして居る。

中庸の本論は總論篇、至道篇、倫理篇、宗教篇、政治篇、修養極致篇に分れ、先づ中庸の意義を説き、次にこれが異端の道に卓越せる所以を述べ、一轉して良心より説き起し更に

孝行を出發點として祖先の祭祀と上帝の畏敬とに及び君主の修身が社會幸福の基礎たることを述べ、最後に聖人の意義を述べて修養の態度を明にし、孔子を以て道の體現者なりとなして居る。

孟子は本來斷片的の漫録であるから、其の所説に一の組織を與へるには相當の學識と努力とを必要とする。

著者は之を政治篇と道徳篇とに分ち、政治篇に於ては孟子の趣旨が當時の社會狀態を解剖し、霸道を排撃して王道の樹立を高調するにあることを述べ、道徳篇は更に性論、修養論、徳論、五倫説、天命觀、出處進退論、教育論に分れて居る。何れも本文を自在に驅使して或は論證し、或は論評を下して隨所に現代の社會問題及び思想問題との聯關を取扱つて居る。

大要右の如くであるから、我等は之によつて其の所説の眞意を把握し、東洋思想の心髓に觸れる事が出来るであらう。

又四書の學習者は豫め本書に依つて所説の梗概を鳥瞰し、次に本文によつたならば蓋し獲る所尠くないと信するものである。

(大學・中庸昭六、一、二、五 四六判二五二頁 一・二〇) 孟子昭六、一、二、五 四六判 三一七頁 一・五〇) 三省堂【推薦昭七、二】

支那の人文思想

中山久四郎著

現代社會倫理學

池岡直孝著

日支の關係は過去の文化的思想的關係より、現在の經濟的
政治的關係へと推移した。而して我等は軍閥治下の現代支那
に於ては學ぶべき多くを期待することは出来ないにしても、
祖國の文化を反省する時夫子の國支那は巨人の如く我等の眼
前に展開し來ることを否定することは出来ない。

この意味に於て支那人文思想の研究は畢竟祖國の文化の淵
源を討究することであり、東洋精神文化の捷徑である。

本書は著者の支那歴史研究を蒐録せるもので其の内容は—
大なるかな孔子—孔子と老子—歴史觀察及び史籍體裁の變
遷に關する支那の思想と西洋學說との比較考察—東洋特に支
那の史學史一斑—春秋と孔子の思想—諸葛孔明と日支の國體
—支那史上の正統論—支那運河に關する考察—唐代の學藝、
宗教、制度—宋代の學術、宗教、制度—漢人民族性—六論衍義
と日支國體—の十二章に分ち、何れも平易に解説批判し、國
史との關係をも併せ論じてあるから支那人文思想の由來する
所を知らんとするものにとつては適當な資料であると信ず
る。

〔昭六、五、八 春秋社 菊判二五六〇 二・〇〇〕【推論昭六、九】

從來倫理學がやゝもすれば抽象的概念遊戲に耽り、社會の
實生活と相關せざるの傾向に墮してゐることは洵に遺憾であ
る。されば倫理學の社會化、實際化は現代に最緊急のことに
屬する。著者はかゝる見地よりダルトムス大學教授ウルバ
ン氏の Fundamentals of Ethics に共鳴して、これに基づ
いて此の現代社會倫理學を著したのである。

其の内容は之を二篇に分ち、第一篇道德の理論に於ては、
倫理學とは何ぞやの問題を説き、形式主義、幸福主義、進化
主義、人格主義等々の倫理學に對して批判を試み、進んで第
二篇に於て道德の實際即ち社會倫理についての見解を、人間
價値の體系、權利の本質、正義、義務、經濟生活の倫理、徳義
の項目に亘つて叙べ、其の附録として社會的良心、道德組織
に於ける制度の任務、個人と制度等に關する論説を附加して
ゐる。

本書を以て社會倫理學の唯一の體系となすものではないが
社會問題、思想問題の現狀に鑑みて、其の指導原理の立場に
ある倫理學の社會化は望まじき事であつて、本書を推す所以
も正にこゝに存する。

〔昭六、五、一一 華華社 菊判四五七頁 三・五〇〕【推論昭六、一〇】

現代倫理學の理念

長屋喜一著

現象學が我思想界に多大な影響を與へた今日、哲學的方面
にあつては、多くの秀れた著者が公にされてゐるにも拘らず
倫理學的方面に於ては、殆んど此の思想を傳へる著書が見當
らない。本書は現代獨逸に於ける現象學派倫理學の紹介であ
るが、現代倫理學の精神なり方向なりを理解するに裨益する
ところ少からざるものがあらう。

今其の内容を見るに、先づ最初に、レオナルド・ネルソンの
關心論の中に、カントから現代の現象學的倫理學へと發展す
べき必然性がある事を指示して「現代の實質的價値倫理學は
カントの形式主義に内容を與ふるものである」との主張の充

分根柢ある事を示し、次に現象學的價値認識論をマックス・シ
エラー著「倫理學上の形式主義と實質的價値倫理學」に依て
叙述し、價値の認識は知覚とか思惟とは全然異なる特殊なる機
能及び作用に依つて行はれ、此の認識作用が價値の王國への
唯一の通路なる事を明かにし、人格論に於ては最高價値たる
人格の詳細にして深遠なる考察をなし、最後にニコライ・ハル
トマンの自由意志論に論及して筆を置いてゐる。

思想甚しく混亂動搖してゐる時に際し、眞に人間として生
きる道を得るために、現代の偉大なる諸思想家の人間觀を知
る事は最も肝要なる事であらう。本書は精讀してかならず眞
正なる人生觀を得る機縁を與ふるものであると信ずる。

〔昭六、一、一五 大明堂 菊判三六〇頁 二・五〇〕【推論昭六、八】

第二 歴史・傳記・地誌・紀行

日本文化史

笹川種郎著

本書は現代公民講座中同書名的一篇を單行せるもので原
始文化、佛教文化、貴族文化、武家文化、町人文化、民衆文

化の六章に分けて概括的に我國文化發達の由來を述べ、日本
文化の概念を得せしめようとしてゐる。原始文化は云ふ迄も
なく原始日本の文化で傳説の時代であり、佛教文化は聖徳太
子の奈良朝天平文化を指し、貴族文化とは藤原氏に始まり、
平氏に終つた平安朝の優美なる文化を云ひ武家文化とは源氏
に依つて代表せらるゝ鎌倉文化の謂ひである。下つて町人文

化は徳川治下の江戸文化であり、民衆文化は文明開花の東京文化である、尙明治以後の文化に關しては他日續編を約して本書には省略されてある。我國文化史を概観せんとする者は好個の書であり、又今後公民としてこれだけの國史に對する知識は是非必要とする所である。

〔昭六、一〇、二八 雄風館 菊判一八〇頁 一・五〇〕【推應昭七、一】

天正遣歐使節記

濱田青陵著

天正年間九州の大友・大村・有馬の三侯は、日本に於ける吉利支丹宗傳道の御禮を羅馬法王に陳べるために伊藤滿所を主席とする四人の少年使節を派遣した。一行は三年餘の歳月を費して、種々の困難と戦ひつゝ、萬里の海路を羅馬に達し無事にその使命を果したのであるが、この事は宗教上の意義は別にしても、尙マルコポーロに依つて歐洲に傳へられた日本人を實際に彼地に紹介したものであつて、同時に彼等が日本の文化上に齎した直接間接の精神的、物質的影響は鮮少なものではない。

著者は本書においてその該博なる智識と犀利なる觀察とを以て、諸資料を基礎として、彼等が出發より喜望峯を廻つて羅馬に到れる旅行の有様や法王グレゴリオ十三世に謁見の顛末を豊かなる想像の筆をもつて細かく描き出した。又併せて

美術上からの説明をも加へたもので、八十餘の挿圖と相俟つて興趣の竭きないものがある。

〔昭六、四、二五 岩波書店 四六判四六四頁 五・五〇〕【推應昭六、七】

明治維新と現代支那

三浦周行著

支那軍閥の跋扈は憎むべきである。然し心ある支那の學徒及び民衆が何を求め、何を望んで居るかは、東洋の指導者を以て自任する我國人の大なる關心事であらねばならぬ。

著者は本書序説の一節に

「現代の中國では日本學の研究熱が一般に頗る盛んであつて日本に關する専門雜誌も刊行され、日本の圖書の賣行も素晴らしいやうに聞いてゐるが大學の中に日本語を選修科目としてゐるところは何れも多數の學生があり、中には北京大學清華大學の如きは日本史を課してをり、又蔣介石氏の校長たる南京の政治學校では明治維新史さへ課してゐる」と述べて居る。以つて眞正なる支那が如何なる段階を辿りつゝあるかを理解することが出来るであらう。

本書は著者が昭和五年末より六年の始めに亘り、各地の各大學の招聘に應じて明治維新史を講ぜし際の講演要領である従つて其内容は多少の重複を免れないが著者の重視する明治時代文化の特色、明治維新成立の要素、明治時代の憲政、法制

教育の史的意義を要約したもので昭和維新の青年に取つても亦絶好の讀物であると信ずる。

〔昭六、一二、一四 刀江書院 四六判三五〇頁 一・八〇〕【推應七・三】

西域文明史概論

羽田亨著

印度、支那、蒙古と研究を進めて來た歐洲諸國の東洋學界は前世紀末より西域地方(支那新疆省)の研究に着手し、爾來、露西亞、獨逸、佛蘭西、英國等の學術的探險隊が何回となく同地に派遣されるに至つた。

各探險隊は氣候風土を異にせる異境の、しかも不毛の砂磧帯に幾多の困難を嘗めつゝ調査に従事したが、その結果古來文明圏外に放置して顧みられなかつた此の沙漠地方から、砂中に埋没せる幾多の貴重な資料が発見せらるゝに至つた。

かくてこの荒蕪地はその古代に於ては燦爛たる文化を保持してゐたものであり、且つ東西交通の要衝を占めてゐたことが判明した。就中佛教文化は印度より支那に輸入さるゝに先立ち、まづ此の地方に大なる根を降したものであつて、山腹を穿つて造營せられた蜂巢の如き石窟寺が續々として発見せられ、その内部から夥しき古經文、古文書の類より五彩の着色約爛たる佛像壁畫等が発掘せられた。我國にても大谷光瑞氏は私費を投じて前後四回に亘り橋瑞超氏を派遣した。又今回更に支那佛蘭西の協同により探險隊が派遣せられた。かゝ

る時に西域史の權威者たる羽田博士が本書を上梓せられたのは讀書子の實に幸甚とする所である。本書は平明なる行文を以て西域地方の地理に筆を起し、東西交通史上に於ける同地方の位置を説き、この地に據れる人種の移動を論じ、それより西域文明の眼目たる同地方の宗教就中佛教美術を詳細に説明し、なほ漢人の西域經營、回鶻人の西域轉住にまで及び、西域文明史を概説しつゝして残す所がない。

〔昭六、四、二〇 弘文堂 菊判一九六頁 三・五〇〕【推應昭六、八】

列國史叢書

希臘史

村川堅因著

佛蘭西史

高市慶雄著

「東西の文化を融合して新文化を創造し以て世界文化の進歩に寄與せんとの大抱負を有する日本國民は、一面に於て東洋文化の精華を闡明して、之が発揚を圖ると共に、他面西洋文化の眞髓を把握し、適宜之を取捨するの用意がなくてはならぬ。それがためには決して現代文化の皮相を觀るに止まらず、遠くその淵源に溯り、深く其の基礎を究めて、始めて其の眞髓に觸ることが出来る。」

とは希臘史の著者によつていみじくも道破された所である。

この宣言こそは誠に列國史叢書發刊の趣意に外ならない。由來我國に於ける列國史の取扱ひは専門學校以上の特殊講義に屬し、國民の多くは中等程度の西洋史によつてその梗概を知るに止まつて居るに過ぎない。又これを出版界について見ても各國史の専門家の手になる此の種の著述は比較的少なかつたのである。この點に於て本書は確かに一の特色を有するものと思ふ。

さて希臘史について見るに、著者は西洋文化の基礎がギリシヤ文化に在ることは言ふまでもなく、ギリシヤ文化の究明はやがて西洋文化研究の第一歩でなければならぬとの見地に立ち、最近までの最も主要なる研究の成果を取り入れて簡単にこれを叙述して居る。

次に佛蘭西は希臘、羅馬以後に於ける歐洲の中核である。佛蘭西史上最も興味ある問題は、古代より中世への過渡期に於て、古代ローマの文化的勢力が、どの程度に新しいゲルマン社會に残存したかと云ふ點と、降つて、大革命以前と以後とに於ける政治上思想上の相違とありとし、時代の推移をはつきり掴み、文化の本質と史實の背後を流るゝ根本思想に觸れんことを意圖して居る。

大要右の如く西洋史によつて、各國の興廢を断片的に學び得た我等は、本書によつて其國々の興亡及び文化の特質を十

分に把握することが出来るであらう。

（三省堂發行 昭六、六、二〇）希臘史 四六判三五〇頁一・八〇 佛蘭西史 四六判二九〇頁 一・五〇〇 【推薦昭六、一〇】

世界史論講

坂口昂著

現代の様に凡てが世界的になつて政治外交の領域に於ては勿論、思想經濟文藝等の諸方面に於ても問題が常に世界的關係を有つて來た時代に於ては、國民一般が正確な知識に基いた世界史の教養を有つてゐるといふことは非常に重要な事柄である。出来るだけ眼界を廣くして常に問題を大所高所から眺め、所謂「世界史的見地」に立つて、時勢を世界的に考察し時代の趨勢を誤りなく捕捉認識することは、現代の我國民にとつては特に必要な事であると思ふ。

本書は我國に於ける西洋史學の巨星故坂口博士がその蘊蓄を傾けた論述であつて、一切文化の歴史の潮流を世界的綜合的に辿り、之が個々の國家、社會、宗教、經濟等に對する關係を闡明したものである。

巻頭の「進講録草案」は今上陛下が攝政宮殿下に在せし時御進講申上げたもので、その莊重な文章と謹嚴な態度とは吾々をして肅然襟を正さしめるものがある。次に第二篇の「古代國家觀」以下、「近世史論議」「近代史學の成立」等の諸篇の中に含まれる諸論説は何れも博士が心血を注いだものであつ

の話等々世の若き人々、殊に農村の青年に一讀をすゝめ度い本である。

（昭六、八、五）日本青年館 四六判二二六頁 〇・五〇〇 【推薦昭六、一一】

橋本左内研究

大久保龍著

嘉永六年黒船が浦賀に來て、大平の夢驚かす蒸氣船たつた四艘で夜も眠れない騒ぎが起つた。幕府倒壊の萌し現れ明治維新の序幕はここに開かれようとして内憂外患交々至つた幕末の多難に際し奮起した雲の如き英俊の群に、一人左内は嶄然異彩を放つて比肩するものは稀れであつた。左内は憂國慨世の熱誠に燃え、緊張し切つた其生活は天地を動かし、鬼神を感じしむる程であつた。

左内は天保五年甲午三月北國の風光春正に甞なる時、越前福井の一藩醫の家に呱呱の聲を擧げた。春秋僅十五歳で修養訓「啓發録」を著して、其志望の遠大、識見の高邁、氣魄の俊鋭、たゞ感嘆のほかない老成振りを示した。二十餘歳にして英主松平春嶽に拔擢されて天下の大事に任じて夙に宰相の器を有つてゐた。其崇高なる精神より迸り出る縦横の機略は、時流を超脱し、外交問題、建備問題について、其大經綸を實現するために劃策奔走した。

人としての左内は、其慈親に對し、弟に對する切々の情は

て、吾々に對して單に豊富な歴史の知識を與へるのみならず、内面的にも多くの示唆と深い反省とを與へるのである。又最後の「隨想録」は、著者が世界各地を周遊してそこに歴史の跡を偲んだところの隨筆集であつて、「雅典の葉」「君府の思ひ出」「落葉」「日本のビスマルク」など何れも興味深い讀物である。

以上、本書は個々の歴史並に文化を所謂世界史的見地に於て論講したものであるが、行文流麗、含蓄亦豊富にして而も叙述は至つて平明であるから、人々に世界史的教養を與へてその展望を廣めるためには絶好の良書である。

（昭六、六、二五）岩波書店 菊判七六三頁 五・二〇〇 【推薦昭六、一一】

私を感激せしめた人々

田澤義鋪著

我國青年運動の第一人者である著者が、過去十年間、各地を旅行せられた間に親しく見聞された、多くの青年の眞に感激せしめられた事實を十數個の短文に綴つたもので、何れの頁を開いて見ても、その努力のさまはひしひしと我等の魂に迫つて來て、無形の鞭うちを感じしめる。日頃は工場に在つて同志と銅屑を拾ひ、又早天に馬糞を拾ひ、日曜毎に田を耕して遂に段當り六石八升一合と云ふ收穫のレコードを作つた青年の話、稻の品種改良に寢食を忘れて奮闘する田圃の英雄兒、弟を高工助教授に迄仕立てる爲に炭鑛夫の生活をした兄

綿々としてつきないものがあり、僕婢に對しては厚き同情の持主であつた。世態人情の機微を噛み分けた左内、清濁併せ呑む左内であつた。

左内は安政成午の獄につながれて、二十六年の短生涯を一期として、一人寂しく小塚原の露と消えたのであつた。本書は景岳橋本左内が其身を國家社會に捧げ次代の文運に至大なる影響を及ぼした至誠一貫の記録であつて、狂騒の苦惱の世界に喘ぐ現代の青少年諸君の、棹さすべき方向に光を與へるであらう。

(昭六、七、一二 玉川學園出版部 四六判三六九頁 一・五〇)

【推薦六、一〇】

佐久間象山

象山先生遺蹟表彰會編

世界の大事を達観し、時流を抜く識見の下に、憂國の至情默し難きは實に國士の典型である。是れ象山をして其名を不朽ならしめた所以のものであらう。時あだかも象山没後五十年、象山先生遺蹟表彰會なるものが組織され、其の事業の一つとしてこの小傳が編纂されたのである。

極めて通俗的に佐久間象山の眞面目をあらはしたもので、全巻を前後兩編に分ち、前編に於て幕末天下の形勢と修養時代、活動時代、蟄居時代に於ける象山の不屈不撓の精神を、主として其の遺著、上書及び書簡等に據つて叙述し、次に先

生が本覺寺よりの歸途、木屋町三條で浪士の爲に刺殺された顛末を述べてゐる。後編は經學、蘭學、砲術、科學、文藝等各方面に於ける象山の蘊蓄と識見とを叙述してゐる。尙附録として象山先生の各方面に關する其道の専門家の講演筆記が載せてあるが、本文と相俟つて啓發する所が多い。

本書はよくこの偉人の高風を追慕せしめ、至誠國につくすの精神と所信を斷行するの勇氣とを養ふに足る良書である。(昭五、一二、二五 地理歴史研究會 四六判二六三頁)【推薦昭六・七】

小泉一雄氏の

父「八雲」を憶ふ

戸川 秋 骨

『父「八雲」を憶ふ』は實に面白い本である。斯ういふ本を面白いと言つては悪いかも知れないが、私はこれ位面白い本を近頃讀んだ事がない。第一に私は一雄さんの口まめ話めなのに驚いてしまつた。私の知つて居る一雄さんは無口な温順な、もの柔らかな、静かな方である。實際それに相違はないが、開巻、その序言と云つたやうな四十餘頁を見て、一雄さんの如何に雄辯であるかに一驚を吃した。始めて一雄さんの眞心に接したやうな氣がして嬉しかつた。何もかも心得て居ながら黙々として居ると云つた方である事を始めて知つた。この本に於ける一雄さんは能辯であるのみならず、何でもよ

く知つて居られる、敏感でもある、觀察力も強い、非常にデリケートでもある。また中々隅におけない皮肉屋でもある。私はその八方にあたり散らして居る皮肉を頗る愉快に思つたこれだけでもこの本は價値があると思ふ。始めに出る博士中の博士は勿論、折にふれては出て来る、全篇に亘つてのいろ／＼の方面への諷刺皮肉は手に入つたものでもあり、痛快でもある。

ではあるが、これは「八雲」先生には直接の關係はない。間接には深い關係もあるが。先生その人に就て言へば之も私は始めて先生の眞面目に接したやうに感じて、非常に面白くまた嬉しく思つた。一雄さんもさう言つて居られると思ふが、これ迄先生はいろ／＼の手段に使はれた。お祭の御輿にされた。實を言ふと私もそんな眞似をした。必らずしも自から進んでしたのではないが。併しこれ迄先生の事に就いて書かれた事、言はれた事は、みな舞臺上の先生に就いてであつた。先生の舞臺顔であつた。然るに今一雄さんに依つて、始めて先生の素顔に接し得たのであるから私はそれを心から難有くうれしく思ふのである。英雄とか偉人とかいふものは、大抵その舞臺顔を描かれて居るものだ。私はこの舞臺顔が大嫌ひだ。従つて英雄傳とか偉人傳といふものは、大抵は嫌ひだ。然るにこゝには日常坐臥の先生が親しく一雄さんに依つて描き出されて居るので、まことに心持が良い。

此處でも私は一雄さんの筆に驚いてしまつた。この筆この

觀方を以てすれば、正しく文壇の第一線に立てると思つた。一雄さんは立ち度いなどは思はれまいが。それは先生の平常が如何にもよく寫し出されて居るからである。そしてそれは一雄さんに對する先生の愛情を中心としたものである。先生はどれだけ一雄さんを愛された事であらう。また一雄さんがどれ程先生を慕つて居られる事であらう。それに拘はらず、否、それであるからだ、一雄さんは随分よく先生に叱られて居る。スパンク、ピシヤリは全篇至るところに見られる。この父子の愛情を中心として、先生の面目が躍如として居る。先生は素よりこの本でシテ役であるが、一雄さんの言はれて居る通り、ワキ役もツレ役も澤山出て居る。が、その内にツレ役程の松樹院様と云つたか、「フェロン公」と先生を呼ぶおちい様や、令弟巖さんがよく描かれて居る。

なほ焼津の御祭禮の景、同地での鮎網の景など、實に目睹するやうだ。私が文壇の第一線云々と云つたのも、一つはこの邊の叙景の筆の力あるところから推しての事である。「大久保」の一章にあるジャガタ坊主の小話の如き、立派な短篇である。併しこの本としては、そんな事は餘談であるかも知れない。

私はなほこの本に描き出された先生の美しい性格、情愛の溢れ等の例をあげて言ひ度いのであるが、許された紙数をすでに超過した爲め、これで筆を擱かなければならないが、先生が頑固に過ぎるかと思はれる程道徳賢固な眞面目な人であ

り、心から日本を愛して居た人である事は、是非一言して置かねばならない。それらに就いてこの本の充分なる紹介の出来ないのを残念に思ふ。

(昭六、七、一五 警報社 四六版五八四頁 二・五〇)【推薦昭六、九】

マクドナルド

齊藤 博著

著者は倫敦海軍會議の随員として親しくこの勞働宰相の面に接し、その人格に傾倒して、歸來本書の筆を呵した。生立より倫敦會議に至る迄の足跡を見てゐる。終始一貫して人道の理想に燃え、不撓不屈の意志をもつて一步一步理想の實現に着手して行く。その誠意！その堅實！蓋し近代政治家の理想的典型である。彼には革命の夢想はない。彼の社會主義は人間の向上と福祉とである。彼は人間性に信頼をおき社會の漸進的革新によつて理想に達せんとする。

(昭六、二、一〇 岩波書店 四六判四二二頁 一・五〇)【推薦昭六、七】

偉人 群像

新渡戸 稻造著

著者の謂ふ所の偉人とは「人心若しくは世相に變化を來す力の持主」のことである。惘然らばその偉人であるが、著者は

の星條旗を見る時、吾々はそこにその獨立戦争を思ひ、廣漠たる平原を思ひ、摩天樓を思ひ、エヂソンを思ふ。誠に國旗はその國の歴史を語り、文化を示し、地域的の分布を迄感ぜしめる等、要するにその國の全部を代表するものである。それ程重要な國旗ではあるが、而も從來、その國旗の制定の由來意義或は國祭日等に關しては一般には餘り多くの注意が拂はれて居なかつた。本書は世界各國にわたり、國民團結の象徴とも見る可きその國旗の由來、國祭日の意義等に就いての研究を極めて読み易き文章で記述されたものである。全體の約四分の一は我國に關する所で、海外に在つて思はざる時と所に日章旗の輝かしい姿を見た喜びの話等は特に感激を深くして讀まれやう。

(昭六、一〇、二〇 同文館 四六判三二〇頁 一・八〇)【推薦昭六、二】

近畿 景觀 (第二卷)

北尾 謙之助著

近畿は近畿の近畿にあらずして永へに我が國民の故里である。その山河を想望するの時、我が國民の心境は期せずして悠久なる建國の精神に想到せしめられる。

近畿の風物を語るものには無数の安價なる名所案内記があり、山陵古社社の巡禮記があり、又極めて學究的な史料がある。しかしながら其の何れにも生命の躍動がない。

之を現代世界各國に求め、大國は大國なりに、小國は小國なりに、偉人と目せらる可き人物數十人を拉し來つて、鋭い、然し、人間味の豊かなメスを當てて居る。殊に本書を讀んで印象を強くせらるゝ所以は、其等組上にのせられた人物は、悉く著者が一度でも二度でも會つて談話を交した事のある人達であることである。

現代歐洲の政界に活躍して、日頃新聞紙上に我々と馴染みの深い英米佛伊の大政治家は固より、白耳義、西班牙、希臘、波蘭等々に至る迄筆を進めて居る。殊に圓滿な人格者のタイブとして、英國政界に活躍する奇才マクドナルド、ロイド・ジョージ、グレイ子、バルフォア卿、セシル子、チェンバレン卿等に關しては逸話を交へつゝユーモアに富んだ筆を縦横に走らせて居る。

本書は嘗て大毎、東日紙上に連載されたものであるが、著者の序言に依れば、之に幾分の筆を加へられて出版されたものである。

(昭六、一、一 實業之日本社 四六判四一八頁 一・五〇)【推薦昭六、二】

各國國旗の由來と國祭日

内藤 堯著

國旗にその國の概念が盛られてあると云ふ事、これは否み難い事實である。我が國旗に就いては暫くおき、例へば米國

これに反して本書には實地跋涉による正確なる地理の知識があり、該博なる史眼があり、卓抜なる藝術寫眞があり、行文は流麗高雅である。それは單なる回顧的な紀行ではなくして近畿の現實をも傳へるものである。現代大和風景の一節に「あの縦横に地形圖を彩るところの軌道を見給へ。そしてそれがみな古き墓場と寺院との死せる國を蘇らす輸血管とも見られ、大阪といふ心臓から、絶えず血液を吸収してゐる毛細管とも見られる。死せる大和は、大阪の動きによつて息づいてゐるのだ」と、警拔なる比喩は洵によく其の真相を傳へて居るではないか。紀行の上乗として敢へて江湖にすゝむる所以である。

(昭六、一、一〇 創元社 四六判三二六頁 一・八〇)【推薦昭六、七】

歐羅巴物語

菊池 重三郎著

歐羅巴に關する隨筆、紀行、紹介は随分あるが特に此の歐羅巴物語を推薦する理由は本書が良く「外國人の無邪氣さ」を一般少年に知らしめるからである。

序言でも島崎藤村氏が述べて居る様に「私達日本人は男女とももつと無邪氣であつていゝと共に外國人の無邪氣さを知らな過ぎる。國民性の異るところに自づと相違も生ずるが、新舊思想の對立、貧富の關係、階級意識などに就ても、我々

は御互にもつと無邪氣な見方をする事も出来るであらう。
此の歐羅巴物語はかゝる意味に於て、年若き讀者諸君に多くの暗示を與ふるものがあり、一般少年讀物として先づ極上のものではあらう。

(昭六、九、一〇) 研究社 四六判二二九頁 一・五〇【推薦昭六、一〇】

私の歐洲土産話

相良徳三著

中學一二年生の人達の爲に書かれた著者の歐洲紀行集である。ともすれば餘りに主觀的に片より過ぎるのがよのつねの紀行集であるが、本書の著者はよく之を意識してあらゆる個人的な記述は之を省略し、歐羅巴全般にわたる紹介に力め、謂はゞ教科書的の客觀性を備へて居る。挿入寫眞の豊富、文章の平易、内容の客觀性、何れの方面から見ても、一枚々々寫眞を示しつゝ、弟に彼地の様子を物語ると云ふ、兄のやさしみのあふれた本である。

(昭六、五、二五) 四六判三一三頁 玉川學園出版部 一・五〇

【推薦昭六、七】

河田楨君の

「山に慰ふ」を読む

田部重治

山にあこがれる人、登山の思ひ出を懐しむ人、總じて山を

隣人として物語られ、或は和美峠の蕪蕪屋殺しに纏はる雪の中の悲劇的光景等、ともあれ人事と自然との接觸といふ方面に貢献してゐる本書の特色は見逃せないものだと思ふ。又行間不知不識の間に地圖の讀み方、山の植物や岩層の見方等に讀者の注意を喚起させる周到な書き振は、親切な山岳書としても尊重されていゝ。更に又冬の山旅の記録に富んだ本書は寒氣と寂しさにともすれば沈滞しがちな人々の心を鼓舞するに十分であらうし、或ひはあちこちの山の沼の幾つもの傳説の素材さは、蒸暑い夏の一夜の好個の伴侶であらう。

單に銷夏の讀物としてよければかりではなくて、にがい人生の途上に渴を醫さうとする人々、人生の意味を考へやうとする人々のために、私は本書を推すに憚るものではない。行文自在、何等のくだはりを感ぜしめないことも、本書を價值付けるものであらう。

(昭六、四、三〇) 山と溪谷社 四六判二八五頁 一・八〇【推薦昭六、七】

峠と高原

田部重治著

凡そ登山と云へば楡の峻峰を仰ぎ、藥師の威容に接する事のみ如く思はれて、峠の美しさ、高原の静けさは、唯その途すがらの添物位にしか思はれなかつたのである。漸く近年この峠や高原それ自體が登山の對象として興味を持たれるや

愛する人々の書齋に、又一つ好適な山旅の書物が加へられることになつた。「一日二日山の旅」静かなる山の旅の二著で既に普く山を愛する人々の間に知名な河田楨君の第三著「山に慰ふ」がそれである。こゝには三千米突級の高峰に於けるスポーツ化された登山の記録や、征服慾を刺戟する登高の文章はないが、山に於て人間の心の鼓舞される機會が、さういふことにはばかりあるのではなくて、むしろ山と親しむ親和の中に、山と融け合ふ内觀の中にこそ潑刺として開花すべきであることを知つてゐる人達には、表題の如く「山に慰ふ」逍遙の記録が、當然親しまれる筈のものであることを自分は信じていゝと思ふ。そして讀者は一種言ひ難い懐しみと快い興奮とを以て、南伊豆の八丁池に、高山植物の多い夏の北上の早池峯や秋の上越の谷川岳に、荒涼とした嚴冬の八ヶ岳裾野に、月光と雪とに凍る一月の三峯山脈の尾根に、春の大藏高丸に、上州神流川の奥山に、著者の流れるやうな才筆を通してさまよひ入ることであらう。特にこの本に於て目立つことは、本書が單に登山の紀行に止まらず、自然と人間との融合調和といふ方面を開拓してゐる點で、山上の牛の番人や、峽谷の宿の素朴な人達や、宿帳に現れる山の商人達や、老いて尙屈強な山案内人や、或ひは又ふと言葉を交す汽車の中の隣り客などが、儂い時空の交叉線上に相會する邂逅の種々相として、さまざまの情景を點綴して居り、行きすりの舊蹟にまつはる頼朝とか貞任とかいふ古英雄達も人情の味はひに富んだ親しい

うになつたのは、當然過ぎる程當然な事であるが今此處に、この高原だけを目當とした著者が「山と溪谷」の同一著者の手に依つてなされた事を世の登山愛好者と共に喜び度い。一歩々々人里を離れて最後に登りつめた峠が同時に次の人里への第一歩であると云ふ事は、如何にも人間のあゆみらしい親しみを覚え、そして又高原、静寂で冥想的で、不思議にも牧歌的な高原は、一度その魔法の力に打たれると、到底忘れ得ぬ樂しみである。殊にその登る時期に於ては、夏より秋、秋より春と、一年を通じて殆ど可ならざる時はなく、一日二日の休暇を利用して氣易く行ける點で、一層我等には親しみ深い。本書に取扱はれたのは、主として東京附近より奥秩父、日本アルプスへかけての峠及高原で、その麗妙な筆は登山案内書としてよりは文學的趣味豊かな讀物として、大方の讀書子に推奨し度い。

(昭六、七、四) 大村書店 四六判二四六頁 一・五〇【推薦昭六、八】

南洋へ！

蟹島を踏破して—— 島崎新太郎著

「ただ單に南洋といふ興味にそゝられて、蟹島と云ふ好奇心にかられて、いはゞナンセンスの旅だ」といひながらも「一萬餘哩、九十餘日間」を駆け巡つた紀行文である。筆致は流暢すぎるほどだ。臺灣、フィリッピンに寄航し、英領ボルネ

オから踏み出してジャワの産業、邦人の活動を見聞し、蘭領ボルネオ、バリ島、スンバワ島、スンバ島を順次探訪し、更に日本人未踏のチモール最奥地にまで入つて、「世界に冠たる地質學上の寶庫」を探り、或は「蠻島の山奥に蠻人と共寝」をし、フロレス島に三色潮の絶勝を探ね、セレベス島を巡つて日本人發展の好適地に着目し、歸路フィリッピンの南端に邦人の農園を視察し、日本統治下の南洋を一瞥して、全行程を了へてゐる。全篇中特に興味深いのは、「奇習に富む島々」

第三 社會・法制・經濟・教育

朝日公民讀本

朝日新聞社編

「日本の現状は、縦の道徳をあまりに多く捨て過ぎて、然も新に守る可き横の道徳を忘れてゐる。各人自己本位に偏執し階級意識に熱中し、權利主張に急にして、義務の履行を省みない。」

巻頭に述べられた下村宏氏序文のこの一節に何等聞く可き處なしとする事は出来ようか。今日一等國として國際間に活躍する我國民は、單純な主従本位の縦の生活から複雑化され

といふ一篇であるが、蘭領唯一のヒンヅウ教國バリ島における珍奇な風物は讀者を飽かさなない。就中、罇と虎との闘争、シヨウガク坊釣り、珍妙な葬式、マカタン即ち掠奪結婚の話、その他セレベス島における日本漁夫の罇との格闘談などは無邪氣なお伽噺を讀むやうである。南洋の概観を傳へる好讀物であり、南洋に志す者には好資料となるであらう。

(昭六、四、一〇) 本郷千駄木新時代社 四六判三三三頁 一・五〇〇

【推薦昭六、八】

て來た。生活が複雑になると共に考ふ可き事は社會生活の意義である。義務である。そして權利である。而もこの義務と云ひ權利と云ふも、單なる理論でなくして固より實踐第一義である。本書はこの複雑な社會生活に必要なだけの知識を常識的に簡明に説明したもので、是程要領よく壓縮されたものは少い。左に項目並に執筆者を掲げて見る。

社會篇(下村宏)憲政篇(關口泰)自治編(前田多門)經濟篇(牧野輝智)國際篇(米田實)

(昭六、八、三〇) 朝日新聞社 菊判三五二頁 一・〇〇〇

【推薦昭六、一一】

民法讀本

穂積重遠著

民法はわれ／＼日本人の日常生活の根本法規であるから現在の日本人の思想なり生活なりとよく調和の出来るものでなくてはならない。ところが現行の民法は三十年も昔に作られたもので、もはや(或は最初から)われ／＼の思想と生活とにシツクリしない點が少からずある。これを我國固有の人情と風俗とに合ふ様に改正しなくてはならないとの議論は夙くから聞かれてゐた所で、現に政府當局によつて民法改正の事業が着々と運ばれてゐるのである。

「併し民法の改正は政府當局だけの仕事ではないのであつて國民全體の仕事なのだからそれについての國民の輿論が出来なくては本當でない。而して輿論が出来る前には先づ以て知識を要する。……殊に婦人に關する問題が……民法改正の一要素をなすのであるから婦人の注意が民法に向けられることは民法其もの爲にも、婦人の地位の上進の爲にも極めて望ましいことである。」(本書本文中より)

本書に於て著者は短かくといふことをモットーとしながら民法全體をあらゆる要點に觸れつゝ而かも條文の無味乾燥な羅列でなしに、誰にも解り易くまた興味を以て讀まれるやうにと苦心をされたのであつて、此の讀本が民法に對する一般

國民の知識慾を刺戟し、輿論を誘發するに役立たんことを所冀して居られるのである。

(昭六、一〇、五) 改訂版 日本評論社 菊版二二六頁 一・〇〇〇

【推薦昭七、二】

常識としての

商法改正の話

松本 燕 治 著

法律は社會生活の爲の規律であるとすれば、それは何にもまして民衆的なものでなくてはならない筈である。ところが事實はこれに反して、法律ほど民衆に縁の遠いものはあるまいと思はれる。法律のことといへば、立法も、その解釋も、悉く専門的法律家に委ねられてゐて、一般民衆は殆んどこれに無關心の有様である。これは法律の正しい維持及びその發達の爲に甚だ遺憾なことといはなくてはならない。何の場合でもさうであらうが殊に所謂職業的法律家には、動もすれば先入的専門的觀念に捉はれた、いはゞ、法律家臭い型にはまつた考へ方があつて、その爲に兎角法律を、またそれに規律される世の中を、歪んだ窮屈なものにしたがる嫌ひがある。

そこへ行くと素人はもとより既成の法律理論とは何の約束もないので、自由な立場から、日常生活に即して、事柄の實質を見る事が出来る譯で、このいはゞ人間的な見方の方が却つて専門的な見方のうっかり見逃してゐたあたりに、屢々思

ひがけなく不合理な點や、不便な點を見出して、法律を、またそれに規律される世の中をより正しいより生き生きとしたものにするのが出来るのである。

今我國では、次々と、多くの法律改正事業が進行しつつあるが、これについて一般民衆が、今迄の様に無關心な態度をとらず、法治國の國民らしくそれを自分の問題として眞面目に考へ、正しい法律の出来ることに對して充分の關心と責任を持つて欲しいと思ふ。

本書は、本年八月に發表された商法改正要綱について、「なるべく多くの人の注意を喚起すべき、要綱の通俗的紹介の必要を痛感し」たる著者が、その目的の爲に東京日日新聞紙上に於てなされた解説に多少の増補訂正を加へたものである。巻末には要綱の全文及び法制審議會の起草した説明が附せられてゐる。

〔昭六、九、一三 千倉書房 四六判一四三頁〇・五〇〕【推薦六、一〇】

法學挿話

藤本正晃著

法學と云ふ言葉は如何にも固苦しい。然も之に挿話と云ふ文字を附けると、不思議にもある柔かさを持つて来る。本書の内容は正にその「法學挿話」である。

昔、羅馬の英傑シーザーが悠々大理石の階段の上に立つて

大衆に呼びかけた。その身には眞白きトガを纏ふてゐた、といふ姿は容易に我等の胸中に描き得る事である。然も此のトガを漂白する爲に特定の晒屋組合があつた事、その守護神がミネルヴァであつた事などは、本書を繕く迄は固より知る由もなかつた。況んやこの晒屋組合を廻つて訴訟問題が起り、それを記念する爲に千五百年もの昔大理石の碑が建てられた事などは、その道の専門家ならばいざ知らず、我々は想像さへ許されなかつた出来事である。

或は又、初夏に花園を賑はすチューリップが、十六世紀の中頃に初めて土耳古から西歐に輸入されたと云ふ事も、それだけで一つの面白い話になつて居るが、著者の云ふ處は勿論其處にはない。この話もいつの間にか投機的なチューリップ賣買として法律問題に結びつけられて結論されてゐる。その他この著者の前著「法律と文藝」に漏れた文藝作品に對する法律的解釋、意義附けなどが、漱石、菊池寛等の幾つかの作品に對し、又ブルツクネルの劇「犯罪人」等について試みられて居る。大體法律と文藝の積篇とも見られるが、勿論本書の内容は文藝のみに限られて居ない。

左に掲ぐる著者の小序は、誠に上品に本書の内容を語つて居る。

「法學に關し、折に觸れて書いた挿話を集めてこの書を編む。さゝやかな書物ではあるがそれ等の話を通じて、緑濃き葉

かげに、はた、赤き爐邊に共に法學を語り、共に楽しむことを得ば、著者の幸これに過ぎない。」

〔昭六、一〇、一〇 日本評論社 四六判三三〇頁 二〇〇〕

【推薦昭六、一一】

法律綱要 (私法編)

廣瀨嘉雄著

國民常識としての法律知識は直接にわれわれの日常生活と結び付き得るものでなくてはならない。ところがわれわれの日常生活に於ける具體的事件を一個の法律的關係として觀察するときは、その關係は公法私法の領域にまたがつて多數の法規に規定されてゐる極めて複雑なものであつて、決して一二人の法規の適用によつて定められてゐる様な單純な關係ではない。従つて従来の法律學書に於けるが如く法典の系統に倣つた編別による説明では一般の讀者がこれを實際生活に具體的に結び付けて考へることは殆んど望み難いところである。

本書は著者もいつてゐる如く私法學を説くことを目的とするものでなくて、國民に實踐日本私法を提示せんとするものであるから、從來多くの法律學書に見る如き法典の註釋に終始することをやめて、生活に即した系統によつて叙述を進めてゐるのである。換言すれば日常生活上の重要な事項を中心に於てこれを各方面から規定してゐる諸々の私法法規を、

その日常生活の關する限りにまとめて説くのである。

これによつて人々はよく實際生活の法律の意味を知ることが出来るであらうし、また説明が實際生活上の具體的問題に關してゐるのであるから何人と雖も充分の興味を以て讀むことが出来るであらう。

〔昭六、一一、二二 神田、雄風館書房 菊判二六二頁 一・五〇〕

【推薦昭七、二二】

大津事件顛末録

兒島惟謙 著
花井卓藏 校

明治二十四年五月十一日當時我國に御來遊中であつた露國皇太子(後のニコラス二世)を、その御警衛の任にあつた巡查津田三藏なるものが白刃を振つて頭部に傷を負はせ奉つた。その頃の日本といへば、歐米各國と不平等條約の下にあり、弱小國と認められてゐたことであるし、一方露國といへば世界の最強大國として恐れられて居た上に、當時シベリヤ鐵道の敷設を企て東洋の經營に虎視眈々たる際である。此報を得た我國朝野が如何に大きなショックを受けたかは想像に餘りあるところであらう。時の内相西郷從道が露國軍艦はやがて江戸灣頭に現はれるであらうといつて痛嘆したといふのも當時の事情の下では無理からぬ事であつたと思はれる。

政府は露國に謝意を表し、我國三千年の歴史を護る爲には津田三藏を極刑に處すべきだとしてこれを皇族に對する罪に

(昭六、一三、一五春秋社 菊判本文一五二頁 附録五八頁一・八〇) 【推薦昭七、二】

女性經濟知識

松村金助著

本書は内容を左の十一の章に分つて説いてゐる。
A、女性と經濟、B、物價の知識、C、配給經濟の解説、
D、デパート經濟學、E、小賣商は何所へ行く、F、月賦は
得か損か、G、消費改善の知識、H、消費生活と税金の話、
I、家計相談、J、家庭生活と醫療問題、K、無盡(たのもし講)。

この内容を見てもわかる通り本書は、家庭生活、殊に消費生活としてのそれに必要な經濟知識を、高女出身程度の婦人の爲にわかり易く説いたものである。實際に役立つ事をモットーとしての断片的知識のエキスともいふべきものであつて學としての纏まつた體系をなすものではないが、所謂通俗經濟知識のともすれば陥りがちな卑俗に墮せず、一應の學的反省の下に正しく説かれてゐる。

(昭六、四、二八 春山書店 四六判二〇九頁 一・五〇) 【推薦昭六、八】

擬せんとした。併し當時の刑法(舊刑法)を正解するならば、津田の罪は謀殺未遂として死刑に一等又は二等を減すべきものであり、無期徒刑より重い刑に處することは出来ないものであつた。そこで此問題は外交問題と司法問題とがからんで非常な難局を展開したのである。そして遂には行政權の司法權に對する干渉とまでなつたのであつたが、幸ひにして當時の司法官殊に時の大審院長兒島惟謙翁が身命と職を賭し、毅然として正論を主張した爲に、司法權の獨立は傷けられる事なく法律の威嚴は保たれるを得たのであつた。これ實に憲法實施一年後の出來事である。

本書は兒島惟謙翁の手記にかゝる大津事件の日誌を花井卓藏博士によつて校正公刊されたものであつて、明治史上の最も有力な資料であると共に一般讀者にとつても極めて興味多き讀物であり、また我國立憲史上の大恩人のためのよき記念塔である。

本書の公刊に端緒を與へられた積積陳重先生の書翰にも「先大人(兒島翁)の大津事件に關する御功績は實に本邦立憲史上司法權維持に關する一大美譚にして永く之を後世に傳へ度と存居候」とある。尙附録として兒島翁と正反對の立場から書かれた「伊藤博文秘録」中「大津事件」の記録を收められてゐる。彼此相照し合はせて讀むならば一層本書の内容の確實さと興味を増すと共に、何人も當時の兒島翁の立場に深い同情と感謝との念を禁じ得ないであらう。

財界の動き

服部文四郎著

底なし沼のやうな不氣味な今日の不景氣はすべての人の感受してゐるものではあるが、それは果して如何なる實體を有してゐるものであるか、如何なる處に因由するものであるか、如何にして打開せらるべきものであるかは、殆ど一般に解つてゐないといつてよい。この事は、この人の與り知らなければならぬことである。本書は數ある類書の中で、觀察の行届いてゐること、説明が平明懇切であること、論旨が一般的に注意深くかつ穩健であること、單に現象の説明に止らず、經濟理論にまで立ち到つてゐること等において一頭地を抜いてゐる。著者は不景氣の實相觀察より入り、金解禁並に世界的不況の關係を詳細に見て、その中心に立つ金の問題を特に論じ、不景氣對策及び將來の豫想を語つてゐる。經濟關係は人間關係なることを力説し、經濟心理の重要性を強調することは、本書の一特色であらう。要するに現今の暗澹たる不景氣も國民の覺悟と對策の如何によつて優に打開し得るものであることを主張し、左翼理論家の行詰論を一蹴してゐる。現今の經濟界の動向を一般的に知る通俗書としては勝れたものと云へよう。

(昭六、八、二五 講談社 四六判五二五頁 一・四〇) 【推薦昭六、一二】

英國の危機

ジークフリード著
早坂二郎譯

英國は今日經濟的に如何なる衰頹期にあるか。かゝる衰頹は何處に因由するものであるか。英國當路者はこれに對して如何なる對策を講じつゝあるか。その當否は如何。英國は歐米國際關係上如何なる地位にあるか。英國は政治經濟上如何なる針路を取るべきであるか。

著者は右の如き問題を捉へて、大局高所より自由に論評し、時には皮肉り、時には諷刺し、縦横に英國の大勢を論述し示唆してゐる。著者の立場は自由主義の正統にあるらしく、社會的大勢の動きに對して必ずしも正鵠な認識は期し難いが英國の國際上における政治的經濟的地位と經濟政策の歴史とに照らして一面の眞理を閃かして居り、戦後デモクラシーの偏重に伴ふ弊害に對しては正しく頂門の一針として聞くべき言が多いやうに思はれる。

著者はアングロ・サクソン民族の政治經濟史の専攻者として、英國國民の爲すある國民であることを信じ、その前途に多大の期待を持ちつゝ、自由な立場から大觀を恣にしてゐるので、論述頗る澄利として興味津々たるものがあり、政治經濟時論としては上乘のものである。尙本書の言説は日本の現狀に就ても與へるものが多い。

ガンジーさんの糸車

金子 健 二著

著者は先き頃第一回亞細亞教育大會に日本代表として列席した際に、ガンジーさんの間接的刺戟に觸發された處が少なくなかつたと言ふことが、本書標題のそもそもの起原であると言ふ。

かつては靈界の巨人を生んだ印度民族も、今や傳統と迷信と虚禮とに眩まされ、巨人の教を心眼を開いて見ようとせず、二千二百に餘る階級で人類平等の觀念を蹂躪し、二百廿種の國語で隣り同志が文字通り南蠻呷舌、時代の流れを餘所に生活の底に蠢動してゐる。三徳のかゝる民族をバツクにしてその瘡を細つた腕で古つばけた糸車を廻しながら、平和と誠實と愛とを紡ぎ出さうとしてゐるガンジーさんは確かに偉い。

印度の民族が彼等の心の糧を、その屬する宗教界の巨人の墓穴の中に求めて、紀元前と何等異なるなき状態にあるのを、波羅門教徒、耆那教徒、印度教徒、波斯教徒等について語り、その迷蒙と狂態と痴愚とを如實に叙述し、其のよつて來る因子を英國の印度政策に在りと力強く説くあたりは、大英國民の襟度を疑はせ、印度民族に對する滾々たる同情が湧く。が

進んで反英思想を展望し、印度政策についての賛否兩論を紹介するに及んでは、讀者は遽かにその是非を判するを得ざるに至るであらう。

次に全亞細亞に呼びかけんとする印度民族の聲としての亞細亞教育大會の概況を叙べ、最後に闇と沈黙の奥に築きあげた驚異の藝術「エロラ岩窟」の美術について述べてゐる。

印度民族の復興、反英思想の起原（是非はともあれ）を知り、東洋文明の源泉であつて、人類文化に寄與したことの多大な精神主義一元論者印度民族の現状を窺ふだけでも興味あるものである。

〔昭六、二〇、一〇尙文堂 四六判二一七頁一・三〇〕〔推薦昭六、一〕

綜合アメリカ論

カイザリントン 著
室 伏 高 信 譯

アメリカを檢討することは世界の流行的な課題であるが本書もその一つである。尤もこれはアメリカに對する煽情的なものではなく、寧ろ哲學的な批判書に屬する。單に觀察者としてでなく、心理實驗家のやうな態度で臨んでゐる。それで「アメリカの精神分析」と傍題されてゐるのである。

著者グラフ・ヘルマン・カイザリントンは獨逸の著名な哲學者で、先著「一哲學者の旅日記」や「ヨーロッパの分析」で歐米讀者大衆の心を掌握したが、本書も獨逸語と同時に英譯が

出て英米諸國にセンセーションを呼び起したものである。

先づアメリカのパノラマ的展望に始まり、米人獨自の精神を分析し、傳統的なビュウリタンのそれを調べ、豊かな郷土としてのアメリカの地理的影響を指摘し、大戦を契機として現れたアメリカ民族精神、そのビヘイビアリズム、社會的關心と奉仕的精神、非官僚性、この事の根源である經濟的勢力の政治的勢力に對する優位、その文化における「青春の氾濫」女尊男卑と幼稚國體の傾向、最後に道徳について論じてゐる。

カイザリントンが分析に用ひた方法は演繹的なので、幾分抽象的であるとの誹りは免れぬが、世界に於ける新しい原始性としてのアメリカリズムに對して肯定的態度をとり、將來のアメリカについて暗示的な豫言を與へてゐる。

幾度も同國諸地方を訪問した獨乙人の眞面目なアメリカ觀文化批評として、一顧の價値は確かにある。

〔昭六、二、二〇日本橋、萬里閣四六判六三〇頁二・〇〇〕〔推薦昭七、二〕

滿洲事變

不戰條約・國際聯盟

松原 一雄 著

滿洲事變に就て諸外國並に國際聯盟の認識不足が常に問題にされてゐる。しかし翻つて思ふとき、我國民自身が果してこれに就て充分の認識と正しき理解とをもつてゐるといひ得

るであらうか。

抑々滿洲に於ける我特殊權益とは何であるか、鐵道に關する權益とは何か、土地商租權とは何か、また支那は如何なる不法の行爲によつて我權益を侵害したのであるか、而して何が故にそれは我が國力を賭してまでも守らなくてはならぬ權益として正當なのであるか、更にまた國際聯盟並に英米がそれを援用して我國の軍事行動を批評せんとするところの不戰條約とは何んなものなのか、その實際的價値如何、英國及び米國は自國の自衛的行爲に關して不戰條約を如何に解してゐるか、更に進んで國際聯盟とは一體何んなものであるか、われわれは果してこれを等閑視して差支へないであらうか、等滿洲事變を正解する爲には是非とも知らねばならぬ重要問題は甚だ多い。それ等の諸々の問題に就て我國民は極く漠然たる觀念はもつてゐるとしても、さて具體的に一々明確な答を與へ得るものが何れだけあつてあらうか。

そして我國民自身のかゝる認識不足がやがて世界各國民をして我國の公正なる立場を誤解せしむるに至つた重大な原因ではないであらうか。

蓋しこの問題に對する我國民の自己反省こそは今日の最喫緊事ではなくてはならない。

本書は國際法學者であり外交史の權威者である著者がこれ等の重要問題に就て我國民の爲に平明適切な解説を試みたものであつて、數多き類書中最も眞面目な最も信頼するに足る

良書であると思ふ。

(昭七、二、一 九善 菊判二五一頁 一・五〇)【推薦昭七、三】

岸邊福雄氏

若きママさんに

東京女教師 倉橋惣三

世の中に面白い本は少なくない。ためになる本も少なくない。しかし、氣のきいた本は案外少ない。岸邊福雄氏の新著「若きママさん」はその氣のきいた本の一つだ。

氣のきいた本とは、讀者に餘計な苦勞や、無駄な骨折りをかけないで、手つとり早く意を通じて呉れる本である。つまり、讀者の求めてもゐないやうなことを、くだ／＼言つたり簡単にいへばよく分ることをたど／＼しく書いたり、そんな著者の自分本位でなく、どこまでも讀者本位に親切に行き届いてゐる本である。さすがに岸邊さん、そこは、一分のすきもない、氣のきいた本をつくられたものだ。

この本を手にしたものは、口繪の頁々から、序文につぐ三百餘頁の本文を、それこそ一氣に讀みつゞけて仕舞はされるであらう。そしてその後がたゞうまかつたといふだけならばそれだけのものだが、何人も考へさせられるところ、學ばせられるところの極めて豊富なのに敬服するであらう。しかも丁度、上手に料理された消化のよい、滋養食のやうに口ざわりよく腹にたまらず、それでゐて養ひになつてゐるのである。

三〇

此の書は外遊みやげ話であるが、著者の外遊は何度目であつたか。一回きりの初印象には感心しないでもいゝことに感心するやうなことがあり、餘り度重なると感心すべきことも感心しないやうに慣れ過ぎたりする。著者の丁度いゝ加減のところ、其の觀察も感想も充分よくこなれてゐる。又著者自らよく囁みくだいて書いてゐられるのだから、讀者にも齒にはさまつたり、咽につかへたりさせるやうなところがない。殊に外遊記でありながら、異國見たまゝの旅話ではなくて外國の話をしなから、著者自身の日頃の所懐が語られてゐるところに此本の大きな特色があるといつてよからう。

外遊記といつてもたゞの見物話ではない。著者の心はいつでも子どもの問題にあり、著者の目は到るところで、子どもの生活を見る。しかもその心の擴つてゆく問題の範圍は極く廣く、その目は細かく鋭く見透すところは極く深い。此の書が讀者に何を與へるかと言はずしても察することが出来る。評者も斯ういふ問題を、我國の婦人諸君——必ずしも若きママさんと限らず——に廣く、深く考へてゐて貰ひたいと常に思つてゐる。しかも、斯ういふ問題は廣く深くといふだけでは足りない。そこには必ず優し味と親し味とが無くてはならない。著者の見方と書き方とに、之れ等の大切な要件が充分よく揃つてゐることは、今更いふまでもないことだが、此の新著に於て特に著しい。

此の書を読んで特に感じたことのもう一つは、斯くもいろ

／＼のことが書き列べられてゐながら、それが断片の寄せ集めでなく、無系統の中に或るといふひを持つてゐることである。之れは此の書を読んで快く感じさせる一つの著しい要素をなしてゐるものである。そして昨年の夏の初め外遊から歸つて間もない著者の口から、此の夏休みは完全に輕井澤の別荘に立て籠つて、氣を散らさないで書きあげようと思つてゐるといふ言葉を聞いたことを、更めて思ひ出さずにはゐられなかつた。

「うちのババと、うちのママと御本讀んでゐる。

ママでもないのに「若きママさん」に讀んでゐる。

若くもないのに「若きママさん」に讀んでゐる。

面白がるのはうちのババ。感心するのはうちのママ。」

著者から此本を贈られた時に、たしかこんなことを禮狀代りに書いて送つたのも、此本の筆致の輕さに誘はれたからであつた。野暮な評者がこんなことを書いた程、此の本はユーモアに充ちた本なのである。

(昭六、二、二五 實業之日本社 四六判三三五頁 一・五〇)

【推薦昭七、三】

幼児の心理

丸山良二著

親として、また國民として第二の國民のよりよき進歩を望まないものはあるまい。この向上的希望を實現するに當つて

心理的方面としては少くとも「如何なる素地に向つてこの希望が十分に達成されるか、また兒童に對する條件の變化は兒童そのものに如何なる變化を出來させるであらうか」といふことを知つて居らねばならぬ。この見地から著者は本書に於てまづ遺傳と環境の問題から幼兒の一般的心理を觀察し、新しい行動主義の心理學等をもとり入れて論じてゐる。人間の深刻微妙な精神活動の端緒としての幼兒の本能、情緒、智能等の發現形態について多くの統計と圖表をもつて綿密な説明と知識を與へてゐる。

幼兒に於ける思考、知覺の状態、習慣性、社會性の形成についても深い研究を爲し、天賦的才能の育成と社會的順應の可能を認めてゐる。

本書は誕生から幼稚園の兒童までの幼兒の心理を理解し適切な指導方法を知るに適當な書である。殊に兒童検査法や智能検査の利用法や幼兒教育を科學的に取扱ふ教育的診斷等に最も意を用ひてゐるから、兒童の教育指導の任に當る保母、教師等に益するところ多大である。

(昭六、七、一 三友社 菊判二四八頁 二・〇〇)【推薦昭七、一】

桃太郎主義教育新論

巖谷小波著

桃太郎主義教育新論は嘗て一度發表したものを、今度多少

修正を加へて再び世に出した著者の教育論である。

「桃太郎」の童話は、小波山人に云はせると、富士山の日本にあるが如くに誇るに足る日本一の存在である。本書は先づ桃太郎の童話の概要から始つて次には現代日本觀を述べて、新日本の教育に論及し、今日の學校教育の劃一主義を難じ、低能教育より秀才教育の大切なこと、教育も病人に藥を與へるやうな教育よりも健康者を一層強壯にする方が更に社會の利益であると云つたふうな觀方で、童話桃太郎を盛んに煽て上げ、次に本論に入つて、人生のあらゆる問題を桃太郎の童話の中から引き出して來て教育論と結びつけ聊か溜飲を下げた感があると云つてゐる。

山人の桃太郎論を一貫した流れは、新日本の教育は姑息な注入を斥けて専ら放膽な開發主義をとり度い、頭に斗り血をのぼせて腹に力の無いやうな人間、精神のみ勝つて實力のこれに伴はない國民は斷じて作りたくない、と言ふ要旨に止まつてしまふ。それだけでは別に取り立て、言ふ程にも思はれないが、然し桃太郎の童話は、古くからして全國の津々浦々に迄行き渡つてゐると言ふ點では日本一だとは誰でも領ける。それを又これ程迄に禮讚したものも日本一だと思はれるこの意味で本書は誰でも一讀して面白い。もとより論旨の詮議立ては自から讀む人の側にあるんだから。

附録として「教育小觀」を載せてゐるが、教育觀に限らず、皮肉と諧謔の交響樂で洒脫な山人の世間學を聞くことが出來

る。

〔昭三、九、六 賢文館 四六判三〇四頁 一・九〇〕【推薦昭六、一一】

歐洲文明と教育史蹟

福 島 政 雄 著

滯歐二年間、或時は柏林の假寓に物馴れぬ生活を託ちつつ遠く故國に想ひを馳せ、いつしか夏も過ぎてリーツエンゼの公園の楊柳の葉が散る北獨逸の秋に會つては、或は歐洲文明の批評となり、或は習俗の皮肉な描寫となり、暫しの間も御國ふりを逃れきれない著者が、柏林の都大路を「逢坂山」の道行を微吟しながらも、尙遺潮ない心を強ひて押し靜めては古典の世界に分け入らうとする千里遊子の感想を、其觸發する事物に應じて書き綴つた文明批評であり感想であり、紀行である。

リンデの「一葉二葉散りそめる夏の日にフイヒテの墓碑を徘徊しては、超獨の道を辿つた理想主義者フイヒテと、ヨハンナ夫人の犠牲献身の行爲とを靜かに想ひめぐらし、夏の日の赤々と照す眞晝に或ひはどんより曇つた日の午後、シュライエルマツヘルの遺蹟や、無憂城を訪れて古を懐ひ、柏林大公園に立つルイゼ後の記念像に對しては、靜かなる日の光を斜に浴びつつ追憶に耽る。

古代ギリシヤ文明の跡を訪ねてナポリからベネチヤへ旅し

チューリンゲンの旅に出では、ゲエテ、シルレル、フレイベル、ルーテル等の遺蹟を訪ねてゐる。

故國には桐の一葉の散りそめる初秋にラインを下つてベエトーフエンの跡を訪ね、ブランケンブルグ、チューリンゲンの森林地方に旅して、シュワルツアの溪谷の美と人情の美とに浸つて止め度なき涙をそそぎ、ベスタロツチ百年祭に列しては、ベスタロツチ研究家としての著者の面影を彷彿させてゐる。

多感の遊子の教育史蹟行脚は、其深き信念と思索の跡を全篇に漂はせてゐる。特に若き教育者に一讀を奨める。

〔昭六、八、二五 日星書店 四六判一九〇頁 二・〇〇〕

【推薦昭六・一一】

人間教育の最重要點 環境教育論

松 永 嘉 一 著

環境教育といふと、教育實際家の間に頻に唱導もされ、實施もされてゐる所謂環境の整理を念はせる標題である。教室の隅々から廊下運動場等あらゆる空間を利用して雑多なものを掲げ出し、一瞬の隙もなく子供を緊張から緊張へと追ひ廻さうといふゆとりのない世界、淺薄な利他と同情の生活を想はせられる。けれども著者の環境教育論は、その名は一つにして其實之と趣を異にしてゐる。

〔昭三、九、六 賢文館 四六判三〇四頁 一・九〇〕【推薦昭六、一一】

歐洲文明と教育史蹟

福 島 政 雄 著

滯歐二年間、或時は柏林の假寓に物馴れぬ生活を託ちつつ遠く故國に想ひを馳せ、いつしか夏も過ぎてリーツエンゼの公園の楊柳の葉が散る北獨逸の秋に會つては、或は歐洲文明の批評となり、或は習俗の皮肉な描寫となり、暫しの間も御國ふりを逃れきれない著者が、柏林の都大路を「逢坂山」の道行を微吟しながらも、尙遺潮ない心を強ひて押し靜めては古典の世界に分け入らうとする千里遊子の感想を、其觸發する事物に應じて書き綴つた文明批評であり感想であり、紀行である。

リンデの「一葉二葉散りそめる夏の日にフイヒテの墓碑を徘徊しては、超獨の道を辿つた理想主義者フイヒテと、ヨハンナ夫人の犠牲献身の行爲とを靜かに想ひめぐらし、夏の日の赤々と照す眞晝に或ひはどんより曇つた日の午後、シュライエルマツヘルの遺蹟や、無憂城を訪れて古を懐ひ、柏林大公園に立つルイゼ後の記念像に對しては、靜かなる日の光を斜に浴びつつ追憶に耽る。

古代ギリシヤ文明の跡を訪ねてナポリからベネチヤへ旅し

著者は、その家庭や學校に於て直接子供に接して得た體驗と思慮深き考察とに基づいて、環境題材の量と質と時と場合とによる環境價値の検討をとげ、「環境としての家庭」「環境としての小學校」「環境としての社會」「環境としての現代世相」について述べてゐる。

本書は、もとより體系的に教育論を試みたものではなく著者の體驗と信念とに基づき熱と力とで現代教育の弊を縦横に論評し、一切の技巧的な教育を否認し、機械化の教育凡て劃一と平凡との曠野の包む灰色の空氣に堪へかねて、生甲斐のある教育の世界を作らうとするのであつて、時に脱線もあり誇張に過ぎると見える處もあり、更に偽善とさへ疑はれさうな處もなくはない。けれども兎角に皮相的な兒童愛の高調者や、西洋焼直しの教育論者の卓説を聞くよりも遙かに興味もあり、反省を促される處も少なくない。

本書は、敢て教育者と云はず、家庭の母親には、「環境としての家庭」の一章だけでも一讀を薦める。

〔昭六、七、五 玉川學院出版部 四六判五六六頁 一・八〇〕

【推薦六・九】

郷土の本質と郷土教育

小 川 正 行 著

本書第一篇では、東西に於ける郷土教育觀を檢討して、早

期人文主義に現はれたる郷土主義の審美的教育観から現代迄の歴史的發展の跡をたどり、最近に於ける郷土教育運動隆盛の原因を、(一)郷土自然の破壊、郷土精神の頹廢、青年に於ける中心的信念の缺乏等の社會的精神的原因と、(二)教育の主知的傾向に對する反動、教育の勞作的傾向等の發育的心理的原因との二とし、進んで郷土教育に對する世間の誤解と反對論とを是正し、

第二篇では、郷土教育の理論を概説して、教育的郷土とは吾々が發達期たる少年時代に於て永き接觸を保ち、之によつて人格の發展を來し、自己の内部に根ざす處の深い調和と一致とを感ずる體驗の世界であり、精神化された自然の一部であり、文化的實在であるから、従つて歴史の社會的に成立した價值感情をもつて中心とするものであると結論してゐる。著者の郷土教育の目的観は、スチーグリツツが「郷土に依つて、郷土に迄、郷土のために教育せよ。」と言つた主張こそ大に我意を得たものだと言つてゐることであらう。

第三篇では、郷土教育の實際について、獨逸諸國の郷土教育に關する現行法規を紹介し、郷土教育に關する教育社會の輿論を、全獨逸小學校會議に表はれた主張と全日本聯合小學校教員總會に表はれた主張とを擧げて、兩者の長短を評論し次に教育の手段としての郷土と教授原理としての郷土とを論じ、郷土教育の材料、各科に於ける郷土教育、郷土教育の實際的施設等について指針を與へ、最後に學校訓練近時の傾向

を述べて各人が自己の特徴と努力とによつて團體のために奉仕する習慣を作り、かくて社會的感情と意志とを育成するにあると言ふのである。

郷土教育論が饒近盛んに唱へられ、郷土教育に關係ある著作も相當に見受けられるのであるが、それらの多くは、實施上の諸問題に關説したものであつて、未だ之が理論的根據を論究し闡明したものは見あたらないので、小川氏の著作はこの缺を補ふ點に於て有意義なものである。

(昭六、五、一五 東洋圖書株式會社 四六判 二・五〇)

【推薦昭六・九】

女子教育の理念

吉 田 熊 次 著

女子教育は、家庭教育振興の問題とも緊密に關連して、現下に於ける最も重要な教育問題の一つである。教育者も一般社會の人々も女子教育の根本的論據を何れに置き如何にして女子教育を施すべきかが等しく關心の中心となつてゐる。本書は女子教育の理念を究明して、其向ふべき處に適切なる指針を與へたものである。

女子に關する問題には解決されなければならぬ幾多の根本問題が含まれてゐる。其等の根本問題を、著者は女子の心理的性質に關する問題と社會的性質に關する問題とに二分し、

前者は女子其ものゝ本質に關する研究であり、後者は社會に於ける女子の地位に關する研究であるとしてゐる。

本書の内容は之を四篇に分ち先づ社會に於ける女子の地位の變遷を述べ、東西諸國に於て古來如何なる地位を女子が占めてゐたか、而して其利害如何を文明史的社會學的に論究し、次に女子運動に關する諸問題の研究に於ては、主として現今歐米に於て行はるゝ女子運動の意義と價值とを究明し、第三に女性論を述べ、各種専門家の女性研究を公平に紹介し、第四に進んでは、女子の自分を論じ、本邦に於ける女子の自分に關する諸家の論旨の要點を明示し、ペーベルの社會主義的女子教育論を批判し、女子の自分の根本理論を探求して更に家族主義的社會の是非と近代歐米の女子教育の實際とを述べ、女子教育の理念は、女子としての人生を價值あらしめるにあつて、其根本は家庭的團體生活に於ける任務を完うするにあるとの結論に到達してゐる。

(昭六、五、二〇 同文書院 菊判四八四頁 三・八〇)【推薦昭六・八】

教育及び教育學の本質

吉 田 熊 次 著

本書は著者の教育體系の中心概念に就いて通俗的説明を施したものであつて、著者が東京帝國大學に於て教育學を講ずること二十有五年、その間教育學並に教育問題を考究しながら

らも、常に教育の諸問題に關して適切なる解決と指導とを與へ得ない不満があつた。この不満は一に教育概念の正當でない結果であるとして、この解決の指針を與へんがため、こゝに教育及び教育學の見方に根本的な改造を試みようと思つたのである。

全篇を五章に分けて、第一章では教育の本質を説き、第二章では教育の對象、第三章では、教育の規範と方法、第四章では、教育學の獨自性、第五章では、教育學と他の學との關係を叙説してゐる。

著者の教育並に教育學の中心は、「陶冶の概念」の尋究に一貫してゐる。教育の眞義は人格の主觀的價值追及の力を培養すると同時に、客觀的價值内容の充實といふことに在る。約言すれば、價值ある人間に迄教へ育てることである。而して陶冶も亦價值ある人格に迄導くことで、存在の世界と理想の世界とを連結する一種特殊の世界であるといふのである。極めて平易に教育と陶冶の關係を論述し、教育の諸問題はこの陶冶概念の上に立ち、陶冶の本義に基づいて決定されるべきで、これが教育獨自の原理であるといふのであつて、一般教育關係者の參考になる點が多いと思ふ。

(昭六、一〇、二八 日黒書店 四六判一八〇頁 一・六〇)

【推薦昭七・三】



近代科學の偉人

並に發達略史

高橋學 著

文化とは「人類の精神的及技術的の一切の能力並にその所産」であると本書の著者もいつてゐるが、幾多の學者の誠身な努力がなかつたならば決して今日の文化はあり得なかつたのである。アラビヤの諺に「科學者のインキは殉教者の血よりも貴し」といはれてゐるが、われわれは今日の文化の恵に浴するにつけて多くの科學界の先覺者に常に感謝すること忘れてはならない。その意味に於ても文化を理解せしめる爲に、その歴史とともに、これが建設に貢献した偉大な學者達の學問的業績と人間の生活とを明かにすることは極めて有意義のことである。

本書は青少年讀者の爲に出来るだけ平易に自然科學界の偉人の傳記と業績とを述べ、これに並行して自然科學史を説いたものである。

本書を讀くものは、そこに紹介されてゐる多くの學界の偉人が、縦令研究そのものに慰められてゐたとはいへ、世間から遇せられること甚だ薄く、その多くの人達が極めて多難な

生涯を終つてゐるのを見て深く反省するところがなくてはならない。尙本書によつて東洋人殊に日本人が多く秀れた科學者を先輩に持つことを知るならば愉快と心強さとを禁じ得ないであらう。

(昭七、二、八 四條書房 四六判本文二八六頁附録九頁 一・八〇) 【推薦昭七、三】

科學は語る

大阪毎日新聞社編

本書は、昨年大阪毎日新聞社が全國讀者から「現代科學」に就いてその解説を要望せられるやうな問題を募集し、その応募總數三萬餘の中から適當のもの約八十を選んでこれが解説を各専門の學者に委嘱し、之を紙上に掲載したもの、集録である。今その主なるものを擧ぐれば、駒井博士の「人間の男女動物の雌雄は何故ほぼ同數か」、川村教授の「傳書鳩はどうして古巢へ歸るか」、三宅博士の「血族結婚の可否」、鳥養博士の「無線で電燈をとすことが出来るか」、中川博士の「植物が生々する夏に人は何故弱る」、藤原博士の「梅雨はどうして起るか」、竹内教授の「最新の物質觀・物質波動論」とは「足立博士の「日本

人と西洋人とは何れが優秀な人種か」野上博士の「夢の原理」田中博士の「養蠶は桑以外で出来ぬか」戸田博士の「日本の氣候と住宅との關係」三好氏の「地熱利用の發電は現在どの程度に進歩してゐるか」等である。其他何れも現代我が國民の渴望して居る、そして又誰しも知つて置くべき「現代科學」を、わかり易く、而も趣味的に解説したものであるから科學知識の普及には大に役立つであらう。

(昭六、三、二 天人社 四五判四八〇頁 二・〇〇) 【推薦昭六、七】

趣味の魚學

佐々木喜一郎 著

ドテラ質に入れ蟹の刺身

辛子なくとも身にしてみる

と俗謡子が歌つた。抑々日本人が魚を好む理由は、一つには四面環らずに海をもつてし、且つ地形が南北に長く延びて延々五千二百里に及んで居ると言ふこの地理的關係が然らしむる處であるとも云へやう。兎に角我輩原瑞德國の民族が農をもつて立國の大本とすと教へられて以來米麥を主食品とすると共に、曠古より「海の幸」を貧り食してゐるのであつて魚食は祖先傳來の習しである。

今日動物學上で知られてゐる魚の種類は凡そ三萬種、その中我國に産する魚族は實に三千餘種と云はれ、その内絶對に

食べられないもの、又は食べる氣になれないものが、多く見ても五百種で、残る二千五百種の魚族が日々食膳に上るのである。かくも多種多様な魚を食ふ國民は地球上他に求むることが出来ない、吾々日本人は實に世界一魚を食する國民である。

「趣味の魚學」は正編と外編とに分れてゐて、正編の方には色々な水産動物についての通俗的な記述があつて、今其項目の二三を拾つて見ると「お正月に用ふる海の幸」「鮎」「淡水に住む魚」「うなぎに就て」「鱈のいろ／＼」「かにの話」「鮎の生理學的研究」等で、何れの項目もやゝもすれば、無味乾燥に陥り易い科學的知識を、趣味ある事項を織り込んで興あるやうに説明して行つたもので、知らず知らずの間に、其むづかしい事をも覚え込んで了ふといふ科學の趣味化を試みたもので面白い。

外編は魚學に關する文學的なもので、「魚と瑞祥」「初鰹」「蟹類漫談」以下十二項目を擧げてゐる、澤山の文獻を擧げてゐて、正編と併せて魚學一般の事を知らうとする者には勿論何人が讀んでも趣味あり實益ある讀物である。

(昭六、八、一四 杉山書店 四六判二六四頁 二・二〇) 【推薦昭六一〇】

野の鳥の生活

下村 兼 二 著

雑音と偽色の都會生活の中に、日々のいとなみに忙しい人々に對して、野の鳥の聲を聞けと云つても、それは或は無理かも知れない。然しはげしい色彩に疲れた眼を慰さむべく、野には緑の草がある。不自然な音響に歪んだ耳には庭木を渡る微風の響さへ快い有めの言葉である。自然はやはり吾等が心の故郷である。餘りにも文化的な近代の人には自然を顧みる事が必要以上の必要さを有つてゐるのではあるまいか。

本書を通じて著者の語る所は、野の鳥の自然の生活であつて之を人の世に翻譯して見れば、如何にもユーモアに富んだ自然の姿である。先づ野の鳥の生活を、その啼き方から、構巢法、抱卵、育雛等につき、精密に觀察して、記述してゐるが、早春の歌手セキレイやセグロセキレイの寒中修業のさまや、ウグヒスの方言についての觀察は人の世のさまと變りはない。人の世のさまと同じと云へば、野の鳥にも乳母もあれば假親もある。要領のよい杜鵑科の鳥は他人の巢に産卵して自分は知らぬ顔して過すと云ふ。この事實も著者の筆を通して見ると、誠にユーモラスで自然の與へた法則に唯従つてゐるこの横着鳥に、憤激する氣にもならない。すべて記述の方法に自然科学者らしい諸語があつて面白く、吾氣者カイツプ

三八

リの構巢に禁じ得なかつた微笑は、抱卵中のサンコウテウの強い母性愛に至つて、嚴肅に引き締められて、又著者と共に紙上にシロチドリ足跡をたどる時はハマバウフウ、ミヤコバナの咲き亂れた砂濱に在るの思ひがする。

その他平生我々が軽々に見過してゐる幾多の事柄が、鳥の生活にとつては重大な意義を有するものであるが事屢々教へられる。例へば終日啼き暮してゐる雄親は、恰も不親切な浮氣者の様にも見えるやうが、抱卵、育雛に身をやつす雌の心勞を痛ふ唯一の慰安者であらうとは、そして又近づく危険をいち早く報知してくれる無二の監視者であらうとは、鳥ならぬ我等にはその有難味も解らない。

鳥の群棲については、社會學者も屢々之を人の世に引き直してその結合本能を語つてゐる。鳥だからとて見逃してしまふにはあまりにも不思議な自然のからくりである。

本書に蒐集せられた鳥類は主として日本産で、しかも我等の身近く常に棲息するものばかりで二三外國の鳥も掲げては

あるが、之は單に比較の爲のみに過ぎない。尙又著者は農學博士内田清之助氏と共に、鳥の生態研究家として名あり、掲載の寫眞及本文中の一部は、啓明會の援助に依つて得た資料である事が序文の中にも記されてある。多忙な日常の中に、せめて一時間でも半時間でも自然と生活しようと思む人々には是非薦めたい本である。

(昭六、五、二五 金星堂 四六判二七三頁 二・五〇)【推薦昭六、八】

生物學大觀

石川 光 春 著

人間も一つの生物であるからには、生物學が人生觀と最も深い關係をもつものであることはいふまでもないところであつて、これを人文知識の最も基礎的な知識の一つに數へなくてはならない。

生物——生命のある存在とは一體何であるか、それと他の存在一般とは何う違ふのであるか、それを最後の課題として研究せんとするのが生物學なのである。

生命ある存在とは結局生活作用を發動してゐるもの、換言すれば生物に特有な生活現象を現はしてゐるもの、ことであつて、生活現象の最も根本的なものとして、新陳代謝、運動、刺戟感應性、生長及び生殖が挙げられる。そしてこれ等に關聯して細胞、死、遺傳、變異、進化等生物學上の重要問題が展開されるのである。

本書はかくの如き、生命一般に關する最も基礎的な諸問題を動物と植物とを包括した総合的な立場に於て考へることによつて、よく生物學全體の輪廓を捉へ、その核心に觸れしむる便宜たらしめようとしてゐる。

本書を精讀玩味するならば生物學上の凡ゆる基礎的知識を一通り得ることが出来るし生物界に於ける人間の地位を理解

地震

中村左衛門 太郎 著

し、その人生觀に何物かを加へることが出来ると思ふ。筆致極めて瀟灑、よく纏まつてゐる。

(昭六、三、二五 内田老鶴園 菊判一八四頁 一・五〇)

【推薦昭七・三】

本書はぐら／＼と吾々の足の下の大地を動かす、あの地震の事を書いた本である。といふ意味は、それが家の潰れる事に關係のない歐洲式地震學の本でもなければ、又これを理解し得るものは幾人もあるまいと思はれる様な高遠な純學理的な本でもなくて、吾々にもよくわかる、従つて吾々の生活に結び付いた地震知識のことを書いた本だといふことである。日本は地震國である。今日まで我國に起つた大地震と稱ばれるべきものは記録に明かなものだけでも、一四五回に上つて居る。つまり十八年足らずに一回の割合で日本の何處かに大地震があつたことになる。惟ふに今日人力をもつては、地震そのものを防ぐことはもとより出来まい。併しながら恐るべきは震害であつて地震そのものではない。而して震害に關する限りでは、人力をもつてもよくこれを防ぐことが出来る筈である。そして震害豫防の第一の要件として國民の地震に對する理解が要求されなくてはならぬ。本書はかくの如き地震知識

三九

普及に大に役立つであらう。

〔昭六、三、二〇 銀座書房 四六判二六二頁 二・〇〇〕

【推薦昭六・七】

星座風景

野尻抱影 著

蟲の聲日毎夜毎に草間にかすれ秋の色も濃くなれば、今迄暑さ凌ぎの添物に天空に輝いてゐた星も、青白い閃光の度を増して、地上のロマンチストに呼びかける度数も愈々多くなつて来る。北斗七星が夜々地平に近づくにつれ、秋の夜空の天頂を占めるのは何と云つても天の川で、その天の川のロマンスを圍んで、右にも左にもロマンスの鉢合せである。而もこの同じ星を希臘羅馬の昔の人も同じ思ひで見てもあらうと思ふ時、永遠、悠久の名辭が單なる誇張ではなく、空を仰ぐ或る刹那に胸のどこかを掠める實感である事が味へる。著者は豊かな文學的趣味を以て、この天空の科學を本書にまゝめて居る。著者の前著「星を語る」の姉妹篇である事は勿論である。大體、春夏秋冬に分つての天空の星の動きと科學、そのロマンス等を述べ、雜誌「科學書報」に掲載せられたものが多い。事柄が浮世離れた天界であるだけに、本書は大人によく子供によく、秋の夜長の讀物にふさわしい。

〔昭六、八 研究社 四六判二四〇頁 一・五〇〕【推薦昭六、九】

四〇

初等天文學講話

山本一 著

天文學は人類の歴史とも古い學問であつて、それが何んなに人生に重要な役割を勤めて来たかといふやうなことを今更らしくこゝで説く必要はあるまい。私共が子供心に先づ驚異の眼を以て見上げたのは日月星辰を懸けて日夜に廻る天空であつた。古來多くの詩人は如何にしばしばこの大空に詩情を寄せたことであらう。またかの偉大な哲學者カントは「わが上なる星空、わが内なる道德則」といつてこの星空に無上の讚美と畏敬の念を拂つて惜しまなかつたのである。人生に對して眞面目な人は、きつと一應は天文に興味を感じないではゐられないのだと思ふ。

本書は京都帝大の山本博士が、初めて天文學に親まうとする人々の爲に「チョークにまみれながら講話するつもり」で天文學全般に亘る基礎的知識を全くの初歩の人にも理解の出来るやうに極く平易な言葉で説明し、また一般讀者には難解な物理學や力學の問題も、數式抜きに眼に訴へて直觀的に理解することが出来るやう、また一つには興味の足しにもなるやうにと多數の寫眞や挿繪を入れてある。

本書は天文學の入門書として、また單に興味として天文に關する一應の知識を求める人の爲に最も手頃なものである。

〔昭六、一〇、一 厚生閣書店 菊判二七五頁 二・五〇〕

【推薦昭七・三】

少年數學史

藤原安治 著

子供に數學そのものを面白く説くことは餘程むづかしいことに違ひない。しかし面白い物語を背景に數學を説き、或は數學を背景に面白い物語りを聞かせることによつて、間接に子供の興味を數學に結び付けることは必ずしもむづかしいことではあるまい。

本書の著者は、兒童の數學指導に興味と刺戟と暗示とを與へることの最も必要なことに着眼し、その目的の爲に數學の歴史を面白く物語ることを試みたのである。例へば計算の起源とともに十進法を説き加藤清正と從卒の話とともに比例の理を教へるのである。

本書を読むと今日われわれが日常の常識として疑はない平凡な知識も、長い歴史と多くの學者の献身的な努力の結果になつたものであるといふことや、また數學といふものが單に机上で作られたものでなくて、われわれの實生活上の必要から生れたものであることなどもわかつて、子供に對して教訓的の意味もあると思ふ。

惟ふに本書はこれを子供自身に讀ませるよりも寧ろ教師或

は父兄が先づこれを読んでそれを兒童の數學指導に應用する方が効果は遙かに大きいであらう。

また本書を子供自身に讀ませる場合にも家庭に於ける父兄の理解ある指導と相俟つことが出来るならば子供を益すると鮮少ではあるまい。

〔教育研究會 上、昭六、一〇、五 菊判二九八頁 二・〇〇 下、昭六、一一、一五 三四三頁 二・五〇〕

【推薦昭七・三】

趣味の食・藥化學

星忠太郎 著

最近に於ける我が國の工業、化學、生化學、食品及び營養化學は斯界の學者、研究家の飽くなき努力によりて續々と新研究が發表せられ、ある部面に於ては已に歐米先進國のそれに數歩を抜きんで居ると言はれて居る。

従つてそれ等の専門家の研究報告は夥しく發行されて居るが門外漢にはむづかし過ぎて到底其の要領を把握することが出来ない。偶々通俗科學書が出版されても、多くは歐米人の業績紹介に偏して、日本人の眞面目な研究は看却されて居る場合が多い。

著者は深く此の現状を憐し日本人の研究を主材として食品化學、製藥化學、工業化學等に關係する事項を通俗向きに取譯めたのが即ち本書である。

四一

魚肉の化學—牛肉の研究—合成清酒と食糧問題—屠蘇酒の化學—餅の話—飴の化學—甘味料雜記—麥酒の來歴—蛇酒と和漢藥研究—魚の油と其の不飽化學の利用—薑の油の新研究—何首烏の成分—寒氣と植物油成分—人皮利用談—便所雜考—糞の科學—尿の化學とホルモン—その他西瓜の化學と其の東漸史—胡桃の話—銀杏の實—苺の話—アイスクリーム發達史—蕃茄汁—葡萄雜志—支那の墨—茶と紅茶と白粉—
等々三十三項に分ち、或は古典を探り、或は歐米の書籍雜誌に其の内容を探り、極めて輕快な筆致を以つて記述して居る。要するに本書は化學常識を求むる社會人、中小學校の職員、教科書風の化學書に不満を感じた人々の良き伴侶となるであらう。
(昭六、一、二、二一 木星社 四六判二六七頁 一・五〇) 【推薦昭七・三】

金屬と人生

加 瀬 勉 著

人生と最も深い關係を有つ金屬に就て、自然科學者によつて、特にそれと人生との關係を念頭に置きつゝ、書かれた一般向きの科學讀物である。
第一章石器時代と金屬器時代に始まつて、第三十五章金屬

と詩歌に終るまで、或は金屬と非金屬、金屬の性質、日本に於ける鐵鑛の研究等、偏しない程度で専門的なものがあり、或は金屬の蠟附法、金屬材料の防蝕法、ペン、南部鐵瓶、衛生と金屬等主として實用本位のものがあり、或は各種金屬のロマンス、日本刀の趣味、聖書に現はれた金屬等専ら趣味を指したものである。
全體の敘述は平明を旨としてゐるが、單なる末梢的知識の平面的羅列に終ることなく、學者的良心の下に、相當の科學的深さが保たれてゐる。
(昭六、五、一〇 内田老鶴圃 四六判四四八頁 三・八〇) 【推薦昭六、八】

第五 美術・工藝

茶 心 花 語

西川 一 草 亭 著

過去二百年の傳統を有する去風流の現宗家である西川一草亭が、茶の湯と生花とに就て、この方面の知識に全く昏い者にも良く理解する事の出来るやうに、平易に親切に説いたものである。生花は兎も角として、茶の湯と云ふものが、全く特別なものと見られ、有閑者流の玩弄物としてのみ扱はれてゐるのに對して、著者は特にかゝる考へ方の誤れる事を説明し、かくの如き茶の湯は、却つて茶の湯の眞の心を知らざる者の嗤ふ可き愚であつて、茶の湯は何人も是に親しむ事の出来るものであり、かゝる混亂せる時代に當つては、特に茶一服よく心頭を淨め澄ますべきである事を力説してゐる。巻頭まづ「茶の湯とはどんなものか」と云ふ一項を掲げ、茶の湯の眞生命に觸れてゐる。その他茶の湯の歴史、茶人傳を始めとして茶室、茶庭、茶會、野點、茶室の床飾、爐、茶釜、茶器等すべて茶の湯に關する知識を懇切に説明してゐる。
生花は著者の家業であるが、これも茶の湯の項と同じく丁寧に、生花の歴史、生花の流派を説き、特に文人生けと地入

の相違に就て述べ、生花の眞生命を論じてゐる。
裝釘は著者の實弟津田青楓がこれに當り、瀟洒たる一本である。
(昭六、三、一 實業之日本社 四六判二六五頁 一・五〇) 【推薦昭六、一〇】

草 と 藝 術

金 井 紫 雲 著

「花と藝術」「樹木と藝術」
温帯を中心として、廣く寒帯から熱帯に迄及んで居る我國の地勢は、自ら植物にも惠まると所多く、四時その折々の美しい姿は我々の日常生活に深い交渉を持つて居る。従つて詩に、歌に、繪畫に、我國人の藝術生活の上に現はれて來る植物の数は實に夥しいものである。著者は、此等の植物と藝術との交渉の研究に志し、數年間の觀察の結果をこれらの書に纏めたのであつて、我々に最も親しい草、花、樹木のみを捕へ來つて、先づ之に簡單な植物學的説明を與へ、四季に依るその姿態の移り變りを述べ、次にはその名稱考、傳説等を涉獵し、最後に之が繪畫詩歌等との交渉を叙して居る。誠に趣味的な好個の讀み物である。尙「草と藝術」は最近刊であつて
四三

「花と藝術」は昭和四年「樹木と藝術」は同五年の発行であるが合せて三部作として此處に紹介し度い。

(昭六、二) 京都、芸舞堂 圖版多数 各三・〇〇)

【昭六、七】

日本畫の鑑賞

近 田 達 嶺 著

近來我が邦に於ける美術展覽會は春秋二期を通じて盛況を呈してゐるが、然しその會場に殺到する觀客は唯隊を追ふて流弊漫評するに止まるやうである。眞に繪畫を鑑賞することを知らず、日本畫の眞諦を會得することなく、足を棒にし眼を疲らせて只空しく歸るものが多い。本書の著者は此處に感ずるところあつて、これらの一般觀客に日本畫鑑賞の豫備知識を與へるために、また日本畫に於ける傳統的精神を理解することによつて、祖國の國に咲き誇る藝術の花を味得せしむる目的のために本書を作つたのである。著者もその序に云つてゐる如く、「日本畫に就ての知識の普及のために、一般大衆目當ての日本畫讀本と云つたやうな本」であるから、隨つて本書は繪畫作家或ひは専門の批評家にとつては不満足點もあらうが、一般大衆が日本畫鑑賞の知識を得んとするには要領よくまとめられた良書たるを失はない。

日本畫を鑑賞味到することは日本文化の精神と國民的情緒を感得することである。最初に「日本畫の見方」として一般繪

四四

畫鑑賞の態度から日本畫の特色と思想を考察し、支那畫と西洋畫が日本畫に及ぼした影響を述べ、觀畫上多くの嚴密な注意と指導を與へることによつて、繪を見ることに興味を喚起してゐる。この中には日本繪畫及び繪畫史に對する種々なる參考書も挙げられてゐる。

眞に日本畫を鑑賞研究しようとするならば、單に作者の傳記や作品に就て研究するばかりでなく、更に進んで各時代思想は勿論のこと、隋唐以後の支那畫の研究が必要である。そこでそれらの關聯に於て日本畫の發達史を一通り述べてゐるこれは「大衆に最も親しみ深い近代程最も精しく傳へる」ことを目的として現代畫壇及び明治大正畫壇の變遷を主とし、江戸時代より上代に至る繪畫史を簡潔に記してゐる。斯くの如く一般の繪畫史とは逆の行方は、今日制作される日本畫に對する吾人の鑑賞眼を開かせるに最も便利な方法である。また日本畫の淵源と發達の跡を辿るに當り、將來に對する進展の道を示すところが少くない。巻頭には現代を主とする代表畫家の代表作品が寫眞版にして集められてゐる。

(昭六、九、三〇 雄山閣 四六判一九〇頁 一・六〇)【推薦昭七、二】

陶磁文明の本質

鹽 田 力 藏 著

東洋文化の素朴的な氣品と高雅なる靜的魅力を代表する陶

磁器、我等の生活に密接なる關係を有する陶磁器に對して我國人は果して幾何の關心と理解とを有するであらうか。かゝる關心が大衆から遠のきつゝあるは一面現代の實利思想の當然の結果ではあるが、他面陶磁器への聯想が必然的に中世的な茶の湯と超現代的な骨董趣味を想起せしめるが爲ではあるまいか。

然しながら文化人を以て自任する現代人は單なる味覺の満足を最終目的とせず、又數千金を値する美術的作品の玩賞に終始せず、日常遇事する無名の一物に自然と人力との堅き握手を見出すべきではあるまいか。

著者は深く想を此處に致し特殊製品の觀察に拘泥せず、又一部の茶人骨董家に阿附せず陶磁文明の本質がかゝつて技法上の變化應用にあり、物質と精神との聯關にある旨を高調せんとして居る。内容は、

自然の配置—窯式の變化—原料と製作—技法の分類—廣義の窯變—主要の製品—瀬戸と唐津—古今の通觀—陶器の標本—埃及磁器の考察—支那青磁の歐洲入—七寶燒の今昔—の十二項に分れて居る。

本書は本年東京美術學校に於ける特殊研究講義の筋によつたものであるから「窯式の變化」「原料と製作」「技法の分類」「廣義の窯變」の諸項の論述はかなり専門的ではあるが、「我國に於ける陶窯の分布と自然との關係」「主要製品」以下の諸項は一般讀者に對しても深遠なる暗示と清新なる感興を誘發す

るに足るであらう。

殊に「陶器の標本」の一項に於ては古九谷、唐津、瀬戸等の逸品を以てせず、海濱、河底の破片の採集整理の勝れる所以を説き、原色圖版を以てせる標本には一個十數錢乃至數十錢の日用品を掲げて陶磁文明の本質の那邊にあるかを知らしめんとして居る。

されば本書の特色は陶磁器を骨董鑑賞家より奪つて、一般大衆の課題たらしめんとするところにあるといつてよい。この意味に於いて本書は江湖に推奨するに足ると信ずる。

(昭六、六、三 平凡社 四六判四七六頁 三・八〇)【推薦昭六、一一】

法隆寺の建築

法 隆 寺 編

所謂「あしひとつあがりの宮」に類する古代建築をいま問はぬとすれば、日本建築史は佛教傳來に伴ふ寺院建築にその第一頁を開くものと云ふべきであらう。推古天皇三十二年、佛教渡來して七十二年天下の寺數は四十六を算した。然も楠風沐雨一千年、世界最古の木造建築として現世に尙その姿を傳へたものは實に法隆寺の金堂その他のみである。そらみつ大和の國のまほらに軒深々と垂れて聳え立つ重層の莊嚴なる佛殿さては相輪高々と虚空をつく崇高なる五重塔、歩廊を左右にめぐらして、息づまるばかりの引締つた均齊美をみせてゐる

四五

中門、一度法隆寺に杖ひくものは低徊去りがたき思にくれるであらう。しかも法隆寺はこの飛鳥朝の建築のほか奈良、平安、鎌倉、室町、桃山、江戸各時代の建築をその境内に擁してゐるのである。各時代各様式、或は莊重、或は巧緻、或は艶麗、或は豪華、各々その特色を持って下らない諸建造物を網羅して法隆寺こそは建築の博物館と稱するも過言ではあるまい。本書は工學博士天沼俊一、工學士藤原義一兩氏がこれら諸建造物の各特色及其の様式變遷の徑路を最も平易に人々のために傳へんとしたものである。挿入百廿二個の寫眞を對照しつゝ頁を繕けば興味自ら盡きず、机上にゐて法隆寺に遊びその階を上り、柱を撫し、扉に觸るゝの感がある。若し法隆寺に遊ばんとするものは、もとよりこの一本を携へてよく古代巨匠の鑿のあとを綿密に仰ぎみるべきであらう。

(昭六、一〇) 法隆寺 四六判一六四頁 一・二〇〇【推薦昭六・一二】

概観歐洲藝術史

伊能 龍 著

歐洲の藝術を、その古代から歴史的に概観したもので、各時代に於ける繪畫彫刻建築工藝美術に亘つてエコールの興亡は勿論中心思想の史的敘述に於て、またその鑑賞玩味の態度に於て、最も公正にしかも印象深く記述されてゐる。著者團伊能氏は美術史の研究者として知られてゐる東大助教授で、

これが氏の研究の包括的發表であることはいふまでもないであらう。

本書は著者の觀察の廣さに照合する深さをもつて、直ちに歐洲の名工巨匠の作品に觸れるの感あらしめ、同時に注意深く集められた適切な鮮麗な多數の挿畫によつて、それらの作風の味到に便ならしめるところが多く、吾人をして歐洲美術の典雅な花園に遊ばしめ、思ふ様にそれらの精華を摘ましめる。殊に中世、文藝復興、バロック、ロココ時代には最もすぐれた史的洞察が下されてゐる。本書の如きは二三の翻譯や著書を除けば、日本人が著したこの種の研究通史として、最初の最も内容ある著述であるといふことが出来る。

(昭六、九、二〇) 神田富山房 四六判本文七〇一頁 附録一〇頁 七・八〇 特價六・五〇〇 【推薦昭七、三】

和洋住宅設備設計の知識

山本 拙 郎 著

生活改善の一重要項目として住宅改善の必要が叫ばれ始めたのは、既に夙いことであるが、その當初には從來の日本住宅のもつ不合理の點のみが多少誇張した攻撃的的となり、しかも一方では二重生活が最も不経済で、且最も非能率的のものとして、一派の人々から理解不足の非難を受けてゐたこととて、住宅改善といへば殆ど常に住宅洋風化のこの様に考

へられたのであつた。

しかし本書の著者もいつてゐる様に、例へば「洗ひ立ての浴衣ほど安價で夏の夕に快い着物がありませんか、外で洋服を着て内で浴衣に着かへた方がどれほど経済的で能率的で且生活を豊富にすることです。住居におきましても、ある室を和風にし、ある室を洋風にすることが、吾々の今日の生活にとつては最も合理的であることになりす。」

かくて今後は、寧ろ益々多重生活の妙用が認められ、合理化も能率増進も、この方向に努力されることになるのだと思ふ。本書も住宅の間取に、また構造に、適當に和洋兩風を摺合することによつて、この方向に住宅改善の進むべき道を拓かんとしてゐる。

本書は、これから住宅を作らうとする人々、または今居る住宅を改良しやうとする人々のよい手引となるばかりでなく一般家庭の主婦の住居常識養成に大いに役立つであらう。

(昭六、六) 實業之日本社 四六判三五六頁 一・五〇〇

【推薦昭六、九】

海と船の知識

久保 且 治 著

日東帝國が三千年の光輝ある歴史を有すると云ふことは上に一系の皇室を載き下に忠良の臣民あつて水魚の和をなすに

因由することは敢えて贅言を要せざる處である。然しながら未だ一回の外侮を受けないと云ふことに對しては、四面環海といふ、自然的位置より受くる恩恵を無視することは出来ない。

かゝる環境にあり、且つあらゆる文明を舶載して今日の強大を致せる我國人が、海事思想に於て缺くる處あることは頗る遺憾なりと言はざるを得ない。

著者は久しく斯界に活躍せる人、この現状を深く遺憾とし海事思想普及の目的を以て極めて平明簡潔に、海事一般、船の知識、海の知識、航海の知識、船員の職務と生活を述べて居る。

明瞭なる挿圖と平易なる敘述とは相待つて、一讀よく海と船との知識を把握することが出来ることを信じ、特に青少年の好讀物として推奨したい。

(昭六、七、一八) 大倉書店 四六判二七〇頁 一・五〇〇 【推薦昭六、九】

九川久俊 著

海洋 海をひらく

理學博士 飯塚 啓

開卷先づ眼につくものは海棲動物の彩色圖版なり。目次には「海」を始めとし「海の迷信と傳説」「海の廣さと深さ」「海流」「海水の物理的性質」「海水の化學的性質」「海底の沈積物」「海洋と漁業との關係」「漁獲の豊凶と其の原因」「浮游生物」「魚の形態の種々相」「毒魚と電氣魚」「魚の寄生共棲」「魚の食餌と其の求め方」「魚の洄游移動の分布」「魚と人生」「淺海の動物」「深海の動物」「珊瑚礁」其の他を合せて二十九節となし、其の最後の一節は「海洋の開拓」と云ふ。

次に其の内容に關して記さんに、第一の「海洋の迷信と傳説」の條下に於ては「海は謎であつた」より説き起し、人魚、坊主魚、海蛇、怪獸、奇獸、船幽靈、不知火、等に及ぼし、海水の物理的性質」の條下に於ては比重、密度及壓力、水中壓力と水棲生物との關係、氷點、沸騰點、滲透壓、光學的性質と透明度、海水の温度、水温分布の縦と横、水温成層、海中の明暗、海の色、海浪、潮汐、潮流、汐干狩等を主として説けり。特に汐干狩の如きはまことに面白く書かれたり。只其

の中に「ノリシヒ」と「ノリヒビ」と二様あるもこれは恐らく後者を採る可きならん。

「海洋と漁業との關係」の如きは著者の得意とするものゝ一なる可く「漁場の範圍と分布」を論じ、海の深度、底形底質と漁業、水温及鹽分と漁業、潮流の變化と漁業、サンマ漁と寒流の消長、カツオ漁と暖流の消長、イワシ漁と沿岸水帯の消長、異種海水の接觸部は漁場として價値大なり等に及ぼして精細なり。讀者も之によつて益する所亦大なる可し。但し其の内に掲げられたる漁場の表中に漁場を分ちて三となし、其の一、沿岸漁場を更に小分して潮間漁場と深海漁場の二とし其の三、遠洋漁場を更に小分して堤磯漁場と深海漁場となされたるは如何。或は前の深海は誤植かとも思はる。

又浮游生物の條下に於ては海産微小生物研究の發端より述べ始め、微小生物とは何かプランクトンは水の色を變へる、オホツク海の海光は怪光か、浮游生物の種類、植物浮游生物、動物浮游生物、歐洲へ移住した浮游生物、プランクトンの棲息場海産浮游生物の季節的分布、微小生物と水中生産力、浮游生物の量、浮游生物の漁場に及ぼす影響等に及ぼし、これ亦精細を極めたり。讀者の之によりて啓發せらるゝ所多かる可しと信す。ただ第二〇三頁中の「自然科學の航海」とは何か脱字

あるにあらんか。

其の他「魚の食餌と其の求め方」「魚の洄游移動と分布」「魚と人生」「海洋の開拓」等讀み去り、讀み來つて、終りに第三八〇頁に至れり。今更ながら著者の取り入れたる材料の豊富なるに感服する次第なり。

四面海を以て圍まれたる我島帝國に於て、此の著書を得たるを喜ぶと共に世に之を紹介して、一般讀者の閱覽を庶幾ふものなり、漁業關係者は勿論、或は汐干狩に、或は海水浴に赴かるゝの士も亦之を一讀せば益する所蓋し少々には非ざる可し。

(昭六、一一、三 七川堂 四六判三八〇頁 二・五〇)【推薦昭七・二】

水 産 常 識

會 田 泰 著

我が帝國は四面海にかまれた國である。随つて海産物は可なり澤山あつて、神代の昔から所謂「海幸」が我が國民の重要な食糧品であつたことは史實がよくこれを證明して居る。

更に日々我々の食膳にのぼる尾頭つきの魚から、調味料の鰹節や、昆布及び婦人の裝飾たる眞珠などに至るまで水産物は可なり我々の日常生活と密接な交渉をもつてゐる。

然るにこれ等の水産物がどうして採れるのか、又どういふ風に處理されて我々の家庭に入つてくるのかなどに就いては

今迄一般に知られて居ない點が極めて多い。

著者はこの現状を頗る遺憾とし、水産知識の民衆化のために本書を編したのである。

内容は季節別とし、春には淺草海苔、身缺鯨と數の子、若布白魚、田作等を、夏には鮎、昆布、ひじき、食鹽、珊瑚等を、秋には鮭、鱒、眞珠等を冬には鱈、鯨、牡蠣、蒲鉾、竹輪、佃煮等の種類について、その漁獲法製法用途を平易に叙述し雜部に於ては燻製魚、罐詰、沃度、海とその生物、水産食品の榮養價値にまで及んで居る。

大要右の如く水産國民の常識養成上好適の讀物と信す。

(昭六、九、一一 富山房 四六判三九六頁 一・五〇)【推薦昭六、一二】

販 賣 心 理

上 野 陽 一 著

一般に賣買は販賣の方法の如何によつて非常な利害のあるもので、この方法の實地的研究は商業上最も重要なものである。そして販賣の上手下手はまた廣告の如何に係ることが多いから、殊に近時の如く商業が繁雜分化するに従つて、廣告の研究もまた重大となつて來るのは當然である。本書はこの販賣及び廣告について心理學的に深い考察を加へ、實際の運用上に便せんとしたものである。

今日の社會に於ては、發明者製造者以外に、販賣者の新しい使命が開けてゐるので、その文化的役割は大である。發明、製造が科學の上に立つてゐると同様に、販賣にもまた科學的管理法が必要になつてくる。廣告は多く物的の形をとつて現れ、販賣は主として談話の形式をとるものであるが、何れも賣手が買手に對して或る種の心理的影響を與へんとするものであるから、その土臺が心理學にあることは明らかである。ただ賣買の心理的過程、廣告は主としてその前半にその本質を存し、販賣術はその後半に主力を注ぐといふ差異があるだけである。

近時發展せる應用心理學は販賣術、廣告方法の實務の上にも貢献するところが多く、此處にはそれが實例を擧げ乍ら詳細に説明されてゐる。「如何にして買手の注意をひくべきか」

第七 文 學

歌 集 椰 子 の 葉

築 地 藤 子 著

著者はアララギの女流歌人、故島木赤彦門下の一偉才であつて、夙に出づべくして出でなかつた處女歌集である。大正

五〇

「如何にして買手の興味をひくべきか」「如何にして買手の欲望を起すべきか」「如何にして買手の信用を博し、満足を與ふべきか」を各項目に分つて、著者の創見と實驗とに基づき、心理學的に有効なる方法を述べてゐる。そして販賣者の立場のみならず、更に「購買者、消費者の心理研究」をも行ふ事によつて、その實際的機能を明瞭にするに努める一方、實驗心理學の立場から、廣告術に少なからざる示唆を與へてゐる。従來生産にのみ費された科學的管理法がアメリカなどでは販賣上に行はれてゐるのであつて、本書の出版は實際家の參考として、一般讀者に裨益するところ甚大であらう。時機を得た好著で、文章も大變平易に面白く書かれてゐる。

(昭六、六、二〇) 千倉書房 商學全集第四十卷 菊列三四〇頁 一、五〇 【推薦昭六、一〇】

四年以來昭和三年までの作を選集してゐる。色彩的であり、情熱的であることは、齋藤茂吉の初期の歌風を想はせる。

藤原林の木の間ゆ朝日のさし出づる家に生れしと語りきかせむ
椰子の葉の枯れて落ちたるかげにして葉につきし鴛鳥のくびはや
せたり。

初期既に對象を確實に把握して、しつかりと据りを見せて

ゐる。

空を行く雲にひびきて花火あがればいづこともなく歌びのこゑ
す

大きな音するものかあををといまだ熟さぬ柿おつる音
大正七年南洋に移り住んで故國を戀ふる歌は、萬葉歌人さ
ながらの切ない思ひを籠めてゐる。

吾子よ見よ護國の葉かけに青くそよぐ草の葉見れば故郷のごとし
宮詣での衣は成りたり遠く来てまゐらせぬべき神の宮もなし
ふるさとの戀しき夕かな子とふたり寂しき家に雨はふりつつ
大正十二年震災に遭ひての歌は、この世なる人の聲の限り
を盡してゐる。

いねがてに夜空仰ぎて時立ちぬ祈るべき神もなしと思はむ
一人子は抱くに吾あり二人子の危き時は神守りませ

詩歌は人間の生きる眞實の聲でなければならぬ。この歌集
には生きんとする誠が張り切つてゐる。詩歌の道はこのひと
すじしかなし。

(昭六、七、岩波書店 六四判二八三頁 二・〇〇) 【推薦昭六、九】

短 歌 入 門

佐々木信綱 著

初めて短歌に志す人を指導することに於ては佐々木信綱氏
を第一人者と云はれる。かつまた氏の短歌にその生命
を打こんだ研究と經歷とからみても、本書が數ある和歌入門
書のうちで最も優れたるもの、一つであり、間然するところ
ないものであることは直ちに首肯することが出来るであらう
いま頁を開いてみるに、その説き進むところ懇切平易、囁ん
でふくめるがごとく、よく注意が行き届いてゐて、強ちに初
學者のみならず、既にその道に深く入つた者も得るところ多
いものであると信する。歌とは何ぞ、歌は入り易き道なる事
趣味としてすぐれたる事、これらの總論篇はともかくとして
も歌の成立、歌の成分のとらへ方、歌心、歌の題材、寫生、
題詠、連歌、歌の調子、詞と文法、讀むべき歌集、歌の命、歌
の力、かうした話の進め方は字義通り手をひいて教へ導くも
のではないか。殊に氏が短歌の道に於ては個性の尊むべきも
のであることを力説し別項に山幸海幸なる一章を設けて、山
を好むものは山にゆくべく、海を望むものは海に赴くべきを
説いてゐるのは、流石に長年和歌の道に従事したる人の行き
届いた意見と云ふべく、兎角に和歌俳句の類が型に墮し、師
匠の模倣に流れる風潮あるに對して頂門の一針といふべきで

五一

あらう。和歌は遊びものではない。己れの感懐を發止と打こんで、胸底よりこみあげてくる情感を詠みあげるべきものであるからである。こゝに一つ氏に對して異議を申し立てたい點がある。それは讀むべき歌集の一項である。もとより「心の花」を主宰する氏としてはその立場、その信念より發せられたることであると信するが現代に於て木下利玄の歌集のみを擧げてをられるのは、いさゝか偏した嫌ひがある。利玄が最も優れたる歌人の一人であり、大なる足跡を印したものであることは、もとより疑をいれる餘地なきものであるが、明治、大正、昭和をかけて指折るべき歌人はまだ、數多い。この點初學者の耳を蔽ひ目をかくすものではないか。入門指導のほか、菅て氏が放送した和歌と櫻、萬葉及び古今の秋の歌の二篇が附載されてゐる。

(昭六、一〇、二八 四六判三三五頁 一・五〇 改造社)
【推薦昭七、二】

短歌論攷

尾山篤二郎著

著者は窪田空穂門出で歌誌「自然」の主宰者、歌壇の愉快な存在として著名である。本書は前著「短歌五十講」以後の論議と感想隨筆の類を集め、第一篇「感想」第二篇「評論及隨筆」第三篇「歌集批評」の組立になつてゐる。著者のものいひは面白い、皮肉、諧謔、奇智縦横といつた

處である。とかく歌壇人はしかつめらしくものをいふか、常識でのかんべんだらりともをいふか、面白いものが少いのであるけれど、著者のいひぶりはいかめしいものではないが相當きつとしたところもあり、知らんふりをしてゐながらかなりよく勉強してゐる。表面見聞きしてゐる人とは違つた眞面目さのある人であることをこの本は知らせる。「歌を作り歌を讀むことが直ちに人生の問題に緊密に結びつかないやうではしようがない。歌を作り進む事即人生に徹することである筈だからである。だから、私は此書物の何れの頁でも、歌に就いて語ると同時に、私の觀、知り、感じた人生に就いて語つてゐるのである。」と「はしがき」に書いてある。誰が讀んでも興味を見出すことが出来る。

(昭六、一一、五 立命館出版部 四六判四六六頁 二・二〇)
【推薦昭七、一】

日本詩歌のリズム

相良守次著

わが國の詩歌の發達に關しては國語學の上から、或は民族學の上から、多少の研究が出来てゐる。然しリズム意識の發生に關しては未だ分명한説がないやうである。そしてこれは詩歌發生の起源とは別に考察せらるべき問題である。五十嵐博士は「國歌の胎生及び發達」に於て、上代の未だ音

數律が定まらぬ頃の人々が、種々の音數による句を組合せてみて色々試みた擧句、次第に五音と七音とを結び付けた形式が、いゝといふ事になつたらしい、と述べられてゐるが、この形式の工合がいゝと考へた原因は明らかでない。茲に問題の起點を置いて、リズム意識の發生から日本詩歌のリズムの問題を解明したのが本書である。特にこのリズムの意識及びその形態の問題が相良氏の如き新進心理學者によつて、實驗心理學的に究明せられたことは注目し得る。

從來詩歌の拍音と呼吸との關係から、十二音氣息適合説が唱へられてゐたが、これを批判するための實驗として

(一)無意味綴讀誦の實驗と(二)拍音のリズム形式に關する實驗と(三)詩歌散文讀誦の實驗がなされ、その結果第一の實驗では十二音氣息適合説の一應の根據を認めるが、第二の實驗によつて説明し得ぬリズム形態が認められ、第三の實驗によつて詩歌のリズムは單に音數と氣息の消極的關係によつて規定されるのみならず、意味によつても變化されることが認められた。茲にリズム意識そのものに就ての心理學的考察が必要となり、實際に讀誦したる詩歌に於いて内省的研究が行はれてゐる。

上古に於ける五七調の起源は、此の實驗の結果によつて、五音七音のリズム形式が吾々の意識に表現される自然の形式として、生理心理的にも優位にあることが立證されたのである。附録の「我が五七調に關する文獻」は日本詩歌論史として

面白いものである。本研究に於ける主眼は韻文のリズムに置かれてゐるから、わが歌道、俳諧道の上に裨益するものがあるであらう。

(昭六、五、一五 教育研究會 四六判七一七頁 三・〇〇)
【推薦昭六、八】

芭蕉入門

萩原井泉水著

「旅に病で夢は枯野を駆け廻る」――一生旅を棲家とし、俳諧のまことに終始した芭蕉翁の面目躍如たるものがある。翁の此の心境を覗ふことは實に詩歌に關心を持つ者の獨占すべきものではなくして、生活の爲めに闘ふ雄々しき現代人に對しても一服の清涼劑たり得ると信する。而もこの事は何等の準備も豫備知識もなく七部集や其の他の作品に直接することによつては困難である。たゞに國語の力の不十分さからのみではなくて、己の貧弱な我執のまゝに芭蕉の姿が歪められ、翁の魂を模索するいらたゞしさを覺えさせられる。

本書はかゝる偏見や焦燥から我々を救つて呉れる。たしかに芭蕉入門の題に恥ぢない。内容は三つに分かれて居る。「奥の細道を語る」は、芭蕉の唯一の長紀行文にして且つ名文なる奥の細道を原文を擧げつゝ評釋せるもの。翁の足跡を慕ふて奥羽を行脚した著者ならではの説き得ざる味ひのある

評釋である。次に「芭蕉の俳句より」では翁の名句四十と門下の十五句とを挙げ表現のリズムの點に重きを置いて見て居るが、これは俳句上非常に参考となる。更に「芭蕉の言葉より」の三十章は翁の遺語、逸話より直ちにその心奥に徹せんとするものである。かくの如くして本書は凡ゆる點より正しき芭蕉理解の第一歩を與へて居る。

(昭六、七、一三 春陽堂 四六判三五〇頁 二・〇〇)【推薦昭六、八】

朝・青く描く

前田 夕暮 著

「私は、柔順な自然歸依者としての自分の姿を、林野の雜草のなかに、山と山との堆積のなかに、或は草地から湧き出る天然炭酸水のなかに、時にはまた都會の鋪道に影をおとす樹、ビルディング谿谷の月夜に啼く蟋蟀の聲のなかに見出すとして其處に、微かながらもはつきりと生きてゐることを意識する。」

これがこの著者の書いた序文の一節である。この人はいつも自然に對する劇しい愛情を描く人だ。彼は自然のすべてを愛する。一本の草の莖を愛撫する。山の傾斜面の青櫨の幹を愛撫する。羊齒の中へすつぽりと轉りこむ。灌木の枝から枝

へ移る小鳥に息を殺す。もぎたての胡瓜に鹽をつけてかり／＼と食べる。溪流にふざけあつてゐる村童達に見とれる。そして新鮮な濃潤とした表現でぐん／＼とそれを描いて行く。その一頁を読むと人は忽ち清潤な一脈の氣配が心の中へみなぎるのを感じる。

これは著者の第四番目の散文集である。既に「綠草心理」「烟れる田園」「雪と野菜」が出てゐる。そしてどれもが誰にも愛讀されてきた。この「朝・青く描く」も誰からも愛せられるべきだ。

(昭六、六、一五 白帝書房 四六判二四八頁一・五〇)【推薦昭六、九】

樹下石上

薄田 泣菫 著

本書は「草木蟲魚」に次ぐ著者の隨筆集であるが、その心境は愈々透徹明朗の極致に達してゐる。或ひは竹を愛し、こほろぎを慈しみ、水仙に思ひをひそめ「雲は皆食べられる」の仙境にまで展開してゐる。これまた一個童心の發露であり、悟達の意味である。その片言隻語の間に見出されるものは人生と自然との融通無碍なる合體である。單に著者の自然に對する愛情のみでなく、自然が著者に示す幽寂である。これは西洋人の到底能く達することの出来ないものに違ひない。飽くまでも東洋的な風韻である。

然しこれをもつて文人墨客趣味と概稱することは未だ淺いと思ふ。「もの音、ものの聲」に耳を傾ける市井の詩人としてのシニカルな觀察行きすりに耳を打つ「蟬の聲」のやうな人間生活の深い洞察が含まれて居り、蘇東坡、倪雲林、吳仲圭、戴醇士周茂叔、陶弘景、劉雲泉、倪元璐、米元章、高鳳翰、顧虎頭、顧駿之等の文人畫工、芭蕉、一茶、松村吳春、法燈國師、頼山陽、源信僧都、千利休等風雅の士の逸話を配して東洋風の氣分のすぐれた生命を汲みつつ、巧妙な話術と含蓄ある詩情を込められてゐる。或ひは超脱の趣きを語り、或ひは風俗の心を述べ、警句あり、皮肉あり、而も輕輕にして醇化された筆致は誰にも興味をひくやうに書かれてゐる。またこゝに盛られてある萬慮を洗ひ盡した宗教三昧境と併せて著者の博識に驚かないものがあるまい。

著者のこの隨筆集は世上俗悪な出版物の中にあつて一服の清涼劑であるばかりでなく餘暇あつて静夜燈下にひもどくならば、自然の懐の暖かさと幽玄閑寂の境地を楽しむことが出来るものである。

(昭六、一、一五 創元社 四六判三二九頁 一・八〇)【推薦昭七、一】

石を積む

別所 梅之助 著

大正の末年より昭和六年までに新聞雜誌等に發表された著者の隨筆、感想、紀行文集である。

書名「石を積む」は本書の一篇の見出を全篇の名としたものである。其の趣旨は「石を積む」といふ古今東西の習俗は色々意味を有するものであつて、これを淳風美俗とのみ解すべきではないと同様に本書の内容は著者の管見若くは偶感に外ならないことを示さうとするものである。

さうした謙遜の辭にもかゝらず、著者の該博なる學殖と犀利な觀察と老熟せる叙述とは萬人の眞摯なる共鳴を餘儀なくせしむる魅力を有する。

筆者は本書を通じて小學校をすら卒業してゐないと告白する著者が、聖書や讚美歌の改譯の聖業に參與し、今は聖書土俗考の研究に専念されつゝある青山學院の牧師であり學徒である事を知り得たのである。

收むる所百篇であるが、就中、ありて覺らず―兼山と婉女と―似た者夫婦か、似る者夫婦か―不貞を責むる心―抑ふるままに―自己の分裂―自信の崩れる時―耐へる力

の如きは讀者を反省せしむるものであり、鶯―シクラメン―春をつぐる花―黄花の菖蒲―駒鳥―小鳥と人と―冬の小鳥―陸の山水―嶽北の雨―土佐をゆき／＼

には著者の動植物に關する造詣、紀行文の作者としての面目を知ることが出来る。

又隨所に基督教に言及されては居るが一般宗教家にありが

ちな臭味と偏狭さを見ない。事々物々の上に意味を見出さんとし、聲なき自然のさゝやきを觀取せんとする著者の態度が基督教的といふならば私はこのよき觀點を支持したいと思ふ。殊に野に咲く可憐なる草花、山に歌ふ數々の鳥の名を自由に指稱するあたりは聖書植物考、動物考の著者として誠に相應しく、其の生活、姿態を艶麗なる筆致を以て叙べ且つ詠する様は世上稀に見る田園詩人の風格を發揮せるものと言ひたい。

内容右の如く本書は敢へて通讀を要しない。其の一篇一篇を味讀することによつて著者の心境を窺ふことを得べく又己が心の平靜を確保することが出来るであらう。

(昭六、九、一二 豐隆社 四六判四八三頁 一・八〇) 【推薦昭七・三】

游 心 錄

堀 口 九 萬 一 著

本書は外交官として永く歐羅巴諸國に滞在してゐた、文藝趣味豊かな著者が、かの地に於て見聞した文藝的な題材を捉へ之を興味深く叙述した隨筆集である。最初の論述「彼等の自然觀と我等の自然觀」は、西洋人と東洋人との間に於ける自然觀の根本的差異を豊富な引例によつて明快に叙説したものであるが、非常に有益なもので特に我々東洋人を啓發する所が多い。其他「海外日記抄」「メーテルリンクの講演を聴く」

「アナトール・フランスの苦心」「海外文豪の生活振興」「倫敦と巴里の社交界の話」「チブシーの話」「外交官珍話」など何れも趣味的な興味深いもので、常に文藝を志す人に有益な書物であるのみならず、一般人にも快適な讀物である。

(昭六、二、二〇 勤町第一書房 四六判四六七頁 一・〇〇) 【推薦昭六、七】

辰野 隆 著

さ ・ え ・ ら

文學博士 吉 江 喬 松

佛蘭西文學を最も深く味到し解釋し批評し得る辰野氏の近著である。冒頭の論文「佛蘭西文學とは」は佛蘭西民族の本來の素質より説明して、明確に對立する二種の傾向をゴオル人の素質に求めて古典的文藝と、浪漫的な文藝との由來を究明する快適の文字である。「近代生活と文學」以下の諸篇は、著者の深奥な學識と犀利な批評とを見するもの、特に「レスボスの女性」に關する一考察は著者の最も得意とするポオドレエルの研究に關する一断片の閃きを見するものであり、「パスカル是非」「モリス・パレス」は著者の文學著としての意向を窺ふに最も好き斷篇である。「マラルメとアミエル」は、機智の閃きの豊かなる著者を知る人には何より興味多き親しみ深き文章である。「アナトール・フランスに就いて」は、從來日本に於て書かれたるアナトール・フランス 文獻中の最上なるも

の、短かき中にフランスの全貌を閃めかし出す著者の才智と筆致とは全く敬服に値ひする。「ボオル・ヴァレリに就て」ではこの正系派純正派大詩人に就いて正確なる解釋を與へられ、教へらるゝところ多く「先驅アンリ・ド・ラトゥウシュ」は隠れたる文人の潜在性を突きとめて、八方からその聯絡を示めさうとする綿密なる研究者の細心な態度を尊くも示してゐるものである。「笑の考察」は特に笑の要素を持ちながら、それを十分に廣汎に露らにはし得ざる日本人にとつては大切な必讀の文字である。「純粹詩歌に關する論争」は、まさに文藝時局に際して必須な大切な紹介であり著者の文藝的態度をも併せて伺ひ得らるゝものである。

「一瞥」と題する項に收められてある「ボオル・クロオデル」「アナトール・フランス」「ビエエル・ルイス」「カチユル・マンデス」「マルセル・ブルウスト」「ジャン・コクトオ」の六篇は、著者の鋭い批評眼と、機智に溢るゝ筆致とによつて、一種の散文詩的表現をもつて、それ／＼の文藝家の特色を浮ばせたものである。他の人ならば十枚二十枚と重ねて尙ほ且つ描き得られざる名作家の面影を、短かき行文の間に巧みに正確に要點を押へて浮ばせることは著者獨特の長所妙所であり、この著者ほど佛蘭西文學の迅速行進、機智の閃めきを體得してゐる人は他に決して見られざるほどの妙味を現はしてゐる。この「一瞥」の各項は特に何回讀んでも興味を覺ゆる全くの散文詩である。「鷓助」の十七八篇の項目に於て、その内容に於て、

著者は思ふまゝの境地を縦横に自在に披歴して、全く著者その人の最も愉快な、淀みなき坐談に接する如く、興味盡くるなき、そして深い泉水より湧き出て不斷の悦びを人に與ふる朗かな温泉の情味と快感とを與ふるもの、かゝる種類の感想隨筆は今日著者を置いて他に求め得られざる尊き學徒の所産である。日本人の本來持つ隨筆的長所と佛蘭西文學より照らされたる心の動きとの一致を見するものといふ事が出来る。「演劇漫筆」及び「俳優の印象」は著者の劇的才能を批評に或は印象に托して表出したものであり、この著者は若し暇さへあれば、優れたる劇作家となり得る才能を持ちながら、それを作品に凝集せしめずして學徒としてまた鑑賞家として批評家として表出してゐるところに、これ等の批評及び印象が決して無味乾燥な説明とはならずして、生きた鮮かな呼吸を持つたものとして眼前に浮び上つて來るのである。これは眞の文藝家のみならず得る印象批評である。それ自身が一種の創作と異ならぬものとなるのである。最後に於ける諸種の書籍批評は、味讀、理解、批判を併せた最も親切な評者の態度を示すもの、この著者の如き深き理解を持つ人に批評せらるれば、恐らく何人といへども心から愉快と感謝とを禁ずるを得ないであらう。要するに「さ・え・ら」の一卷は深き學識と豊かなる文藝的才能と正確なる批評眼の持主ならずしては書き得られざる、近來嘗て見ざる豊かな感興を與へらるゝ快著名著である。

片 影

矢野 峰 人 著

「この一巻に収めた英文壇十五名家の片影は、去る一九二六年の夏から一九二八年春に亘る一年有半、海外放浪の間に私が親しく接觸し得た彼等の印象録であり瞥見記である。大方の目を南船北馬に過して一所不住の身であつたため、或はまた、こちらに閑暇の出来た時には生憎と先方が病氣であつたり國外に在つたりしたために、用意した紹介状を使ふの機無く空しく持ち歸つたものも少なくない。然し凡そ會ひ得た程の人からは「異國の人」たる特権を以て同じ國の人の容易に聞き出し難い際の事柄をも多少聞き得たのは、私の窃に歡びとし、幸とするところである。」

以上が著者の序文の一節である。即ち本書は著者が親しく而接した英文壇の十五名家との會見記である。而して著者の流麗暢達な筆はよくこれ等文壇人の風貌を描き出して残すところがない。讀者は著者と共に親しくゴット村の古色蒼然たる「塔」の一室にイエイツと相對座し、蠟燭の蒼白い光に半面を照らされた老詩人と更けゆく夜半に相語るの感銘を受けるしかもイエイツは日本の歌舞伎を語り、菊池寛や久米正雄の名を擧げるのである。又讀者は著者と共にエイ・イイ

の家に於ける「日曜の夕」の集ひの團樂の中に身を置いてダブリンの藝術人と相談笑するの思ひがある。
一巻を通じて流れる高雅なる氣品は蕪雜にして粗野なる著書の汗牛充棟も只ならざる日本出版界にあつて誠に高き位置を占むべきものであり、大方の心ある讀書子の一讀を切に奨めたいものである。
イエイツ、エイ・イイの外グレゴリー夫人、オオサリヴン、ハウスマン、アアサア・シモンズ、エドマンド・ゴス、キルフリッド・ギブスン、ブリヂス、等我國にも親しみある作家があげられてゐる。
（昭六、九、一〇）研究社 菊判二五一頁 二・〇〇〇【推薦昭六、一一】

父親としての

ゲ ー テ

三 井 光 編 著

本年三月二十日は詩聖ゲーテの百年忌に當るので、本國ドイツに於ては彼の終焉の地ワイマール市にて大統領會の下に盛大なる記念祭が行はれるのを始めとし、世界各國に於て各種の催しがあるべく、我國に於ても日本ゲーテ協會を始め、各大學その他獨逸文學關係方面に於て記念祭記念出版が行はれる豫定である。

本書はこれ等記念出版の先頭を切つて上梓せられたものであるが、そのテーマとする所が父親としてのゲーテを扱つた

ものであつて、聊か特殊のものであり、ゲーテ傳の一つとしては興味深い著書と云ふことが出来る。

若くしては「ウエルテル」の著者として天才の名を壇まゝに「親和力」「マイステル」「ファウスト」等の傑作によつて「宇宙」の名稱をすら受けるゲーテも、その子アウグストに對しては全く平凡なる老父であつた。我愛子に對しては、世間の期待に反して、よき事務家であり、良市民であることを希望し、ナポレオン戦争に際しては、戦亂の危地に我子を送ることを恐れて、世間の嘲笑を受け、その就職のためには身を屈してワイマール公に嘆願の書を送る等、子を溺愛し、却つて子を誤る好々爺であつた。本書はよく詩聖ゲーテのその光輝ある生涯の半面における弱き人間味を描いてゐる。
（昭七、二、二〇）第一書房 菊判三五五頁 一・五〇〇【推薦昭七、三】

下から見た世界

アルミン・デー・ウエーケネル
三 井 光 編 譯

これは幼兒を取扱つた小説であるが、從來この種のものには意識的にせよ、無意識的にせよ、大人が見た子供の世界であるのに、これは子供自身の心理に映する世界であるところに特色がある。

本名をモーニといふ一幼女が、生れて十四箇月、始めて單獨に歩き出した瞬間から、満三歳にして自我意識の目覚める

迄の心理過程を精密に描いてゐる。この新奇な題材と大膽な着眼にまづこの小説の成功の第一歩があるが、更にこの描寫の美しさは著者の並々ならぬ手腕を示すもので、子供がもつ驚異や本能や意欲を有りの儘に描き、目前にモーニの行動をみる思ひがする。

平凡な世界も幼兒の目を以て見れば總てが新らしい驚きであり、その世界は大人の足から下である。ゲーブルの足や建物の下部や床や道路が親しいものとして書かれてゐる。幼兒がかうして「下から見た世界」には父母や兄弟や下女や給仕人の生活があり、それが子供の智能で解釋されてゐる。幼兒が一つの完成した發達段階にあるといふ最近の心理學上の學說の證明がこゝにある。また魚の中に父親を認める思考や空に一人の青い男がゐる澤山の灯を街燈のやうに澤山點けながら世界を廻るといふ考へや、最後に「自分」と云ふものに疑ひを抱き、自分の中に他の「山羊」がゐる我儘をさせるのだとばかり思つてゐたその「山羊」が「自分」であると直感する自我意識の自覺等は、かういふ小さな子供の中に繰返される自然民族的思考と合致するものである。

此の直感と洞察に富んだ小説は、兒童生活を研究する人々によい暗示を與へるのみならず、常に子供の教育に關心をもつ父母が讀んで反省すべき多くのものが含まれてゐる。現代獨逸文壇の巨匠トーマス・マンが、本書の優れた藝術的價値を賞揚し、また「眞にこれこそ世のあらゆる母親のための書だ」

と云つて、一般家庭の好讀物としてこれを推賞してゐるのも故なしとしない。著者ウエークネルは、獨逸ライン州の工業都市エルベルフェルト市が生んだ尖端的な都會詩人で、その氣のきいた都會風の詩的香氣は全篇に漲つてゐるといつてよい

(昭六、六、二〇) 第一書房 特大判三一〇頁 二・五〇

【推薦昭六、一二】

近世騎人傳

坪内逍遙著

内容は喜劇、近世騎人傳

舞踊劇 變化 雜

同 鶴の榮

同 良寛と子守

からなつて居る。

騎人傳では雲萍雜記で有名な、大和郡山城の家老柳澤里恭(號淇園)と京都の畫家池野大雅堂の騎人振りを取扱つてゐる。前者は常に數十名の浮浪者を食客として蓄へ、後者は數々の逸話を残して居る騎人である。この兩騎人の間に醸し出される珍風景は蓋しはるのや主人の獨壇上であらう。

「變化雜」はナンセンス時代に相應しいもの、「鶴の榮」は「高砂や」の代用となる祝賀用兼舞臺用の試み、「良寛と子守」は解脫の人の面目を躍如たらしむる好舞踊劇。

(昭六、三、一五) 東京堂 四六判二六五頁 一・八〇 【推薦昭六、七】

夜明け前 (第一部)

島崎藤村著

「若菜集」「落梅集」に美しい水々しい若やかな詩情を詠ひあげた藤村も鬢髮既に白く齡六旬を越えた。思へば明治大正昭和と貫いて来た長い足跡であつた。殉情の詩人として自然主義の巨匠として文壇に地歩を確立して以來既に四十年、幾多の優れた作品を生み出して来た藤村こそは、わが文學史上に巨大なる一線をひいたものである。その間、幾多の作家が輩出し、幾多の作家が僅かな仕事を残したのみで消え去つたなか、常に重厚堅實なる足取りをもつて一步をも疎かにすることなく、その歩々を踏みしめ、踏みしめて進んで来た藤村は齡六旬を越えて、最後の大作の筆を起した。文壇人は元より、いさゝかでも文學に關心を持つ程の人が齊しく、この老匠が全勢力を傾注せる作品の完成を期待した。藤村はしかし焦らず騒がず、周到なる準備と刻明なる創作良心を掲げて一年三回づゝの發表を宣し、これを成就して、まづその第一部を完成した。これが「夜明け前」第一部である。

この大作の舞臺は藤村の郷里であり、屢々その作品の中にもられた所の木曾の馬籠村である。そして時代は幕末の黒船來航、井伊大老の閩國策斷行、尊王攘夷論の擡頭、徳川幕府崩壞期の接近當時の物情懸然たる寒圍氣にとつたものであつ

て、この險惡なる時代の動きが木曾谷に波及して来る姿を如實に描き出さんとしたものがこの大作の眼目とするところである。而してこの時代變轉の姿に最も敏感に觸れて、時代苦を嘗める者としての馬籠の庄屋青山半藏とその周圍を描かれてゐる。

輕佻浮薄なるチャイナリズムの跳梁跋扈のために純粹なるべき文學が蠱毒せられること甚しく、眞に萬人が均しく手にすべき作品の兎角に缺如せる時代にあつて、かゝる重厚にして謹嚴なる作品を送り出されたることは日本文壇のために眞に喜びに堪えない次第である。

(昭七、一) 新潮社 四六判七二七頁 一・八〇 【推薦昭七、三】

軍記物語研究

五十嵐力著

保元、平治、平家、太平記の四大軍記物を、あくまで専門じみずに、藝術的に味得することを第一義として述べたものであつて、教養ある男女が、それ／＼の家業にいそしむ暇々に、遠い昔から武士道といふ特殊の國民的徳徳を成り立たした吾々の祖先達が、君のため國のために命を捨て、戦つた悲壯な生活を寫した文學を味はへる様な體裁に出来てゐる。従つて語句の解釋も簡單で、其場々々にびつたりと當て嵌る言葉で説明し、特別な味ひの語句についてはそれ／＼脛辭的説

明を施し、長い一篇の中から代表的の一章乃至數章を選び出してあるが、(例へば「光頼卿參内」、「待賢門の戦」、「祇園精舍」)段々に讀み進んで行く中に、「時」と「所」と「事」とがいつとはなしにあり／＼と浮んで来るのである。

其間、軍記の内容と形式とは相並んで發達し、武士が社會の從位を占めた時に軍記も時の文學の中の從位を占め、武士が天下の第一位を占めるに及んで軍記も始めて時の文學の中に第一位を占めた事、そして其時は軍記の最も發達の頂點に達した時であつた事等を例解し、更に軍記は武家生活と戦争との描寫に力點を置きながら、同時に公卿道、戀愛道、藝術道等の種々相をも寫し、殊に無常悲哀の人生觀によつて統一せしめられた事によつて大成したものである事等を述べてゐる。最後に「平家物語の新研究」の一篇を添へてある。

(昭六、三、一五) 早稻田大學出版部 菊判四二六頁 二・八〇 【推薦昭六、七】

徳川時代の藝術と社會

阿部次郎著

徳川時代の平民藝術は日本藝術史上特殊の色彩と意義とを有するものである。西鶴の小説、近松の淨瑠璃、歌麿の美人畫等は如何なる社會に生れ出たものであるか。如何なる意味に於て當時の社會生活を反映するものであるか。かゝる藝術

文學汎論

佐藤清著

を生み出した血液を繼承する現代人はこれに對して如何なる待遇を與ふべきであるか。この特殊なる藝術は將來文化に對して如何なる意義を有するものであるか。抑々徳川平民藝術の人生的文化史的意義は如何なるものであるか。著者はこれらのことを課題としてゐる。

徳川時代の平民藝術は、究極に於て、人格の尊嚴と自由とを認めぬ社會關係によつて制肘された歪曲の美である。人間の不屈な生活力は、社會關係の非人格的な拘束によつて、曲つた美として顯現された。人格の高き全き發展を希ふ人格主義に照して、それは悲しむべき、憐むべき藝術である。將來文化はこの據つて立つ根本精神の否定より出發し、その底に呻いてゐた民族創造性と普遍人間性とを發展せしめねばならぬ。これが著者の結論である。

著者の犀利な考察と精透な論究は讀者を藝術の眞義に導き入れ、文化の眞の發達は人格の尊嚴と自由とに根ざさなければならぬことを教へ、現代文化に對する間接の批判として聞くべき多くのことを含んでゐる。徳川平民藝術をそれ自身獨立に鑑賞禮讚するのではなく、社會人生との關聯に於て、眞にその文化的意義を内底より闡明して餘蘊がないと思ふ。現代における貴重な著述といふべきである。

【昭六、六、二五 改造社 菊判六二頁 五・〇〇】【推薦昭六、一〇】

現代の文化はその複雑な形態をもち、今日その評論は難解を極めてゐる。これを概説し説明するためには博學多才を要することは勿論である。殊にそれを分り易く書くことは至難の業でなければならぬ。本書は文學の原理及近代英文學思潮を普通の讀者のために成るべくわかるやうに書かれたものである。

前篇「文學概論」には「詩の研究」「批評論」「文學思想」「劇の研究」等の諸項を含み、矯激な論議を避け、いたづらに末梢的論說に走ることを控へて、根本原理を取扱つてゐる。文學全般に對する概念を規定するに當つて、豊富な材料と平明な文體をもつてし、その「いかなるものか？」の疑問を順々に解き明してゆく。殊に詩人である著者は、文學の基石として「詩の研究」に最も意を注いでゐる。そしてまた生活批評と文學批評は常に根柢に於て手を握つてをるべきものとして、アノルドとベイツアの批評的態度を述べ、之に對する修正批評を行つたジョン・オルディングトン、シモンズの批評を詳明し、更に主知的批評家としての現今英米文學上の慧星テイ・エス・エリオットを擧げて「批評論」に重きを與へ、世界文學の一大思潮である浪漫主義と古典主義について深い洞察を示して

ゐる。また「劇の研究」には劇作家、舞臺、俳優の三要素を擧げ「劇の法則」「劇の構成」「劇の解剖」から「近代ロシヤ劇」に至る。

後篇「近代英文學評論」に於ては、英文學者としての著者の讀書と識見から多くのものを示してゐる。まづ「浪漫文學時代の詩歌」に於て、英國浪漫文學を形成する要素として六人の詩人——ブレイク、ワーズワース、コールリヂ、シエレー、キーツ、バイロンを紹介し、この文學運動の範圍と特質を明らかにすると共に、「その社會的背景」を求めて産業革命や階級問題に觸れ、「産業革命の詩人クラブ」「貧民階級の詩人、ロバート・バーンズ」「湖畔詩人たちと階級問題」等は興味ある問題である。著者は文學と社會との緊密な關係を認めると同時に、作家の内的活動を重する純粹な藝術家としての態度を

第八 兒童讀物

をさなものがたり

鳥崎藤村著

藤村と云ふ名を聞くと、人は直ぐ濃厚な親しみ深い藤村の風貌を思ひ浮べらう。それから彼が書きたいくつかの有名な小説や紀行や感想やを思ひ出すだらう。そのどれもが落

ちつた、しみじみとしたおだやかな筆致で書かれてゐて、いつも讀み手の心の中へしつとりと浸みこんで來るのを感じるだらう。藤村が子供のために書いたものもやつぱりそれ等と變りがない。靜かな筆が素直に少年の感情を描き出してゐる。だからそれがどんなに良い讀物であるか、人は直ぐに頷くことが出来るだらう。この「をさなものがたり」は藤村が子供のために書いた第三番目の本である。この前に「ふるさ

【昭六、一〇、一〇 四條書房 四六判三九〇頁 定價二・〇〇】【推薦昭七、二】

女子教育の理念	吉田熊次	34
教育及び教育學の本質	吉田熊次	35

第四 自然科學

近代科學の偉人	高橋學西	36
並發達略史	大阪毎日新聞社	36
科學は語る	大學部編輯	36
趣味の魚學	佐々木喜一郎	37
野の鳥の生活	下村兼二	38
生物學大觀	石川光春	39
地震	中村左衛門太郎	39
星座風景	野尻抱影	40
初等天文學講話	山本一清	40
少年數學史上下	藤原安治郎	41
趣味の食・藥化學	星忠太郎	41
金屬と人生	加瀬勉	42

第五 美術・工藝

茶心花語	石川一章亭	43
草と藝術	金井紫雲	43
日本畫の鑑賞	添田達嶺	44
陶磁文明の本質	壘田力藏	44
法隆寺の建築	法隆寺編	45
概觀歐洲藝術史	團伊能	46
和洋住宅設備設計の知識	山本拙郎	46
海と船の知識	久保且治	47

第六 産業

海をひらく	九川久俊	48
(飯塚啓氏推薦文)		
水産常識	會田泰	49
販賣心理	上野陽一	49

第七 文學

歌集椰子の葉	築地藤子	50
--------	------	----

短歌入門	佐々木信綱	51
短歌論攷	尾山篤二郎	52
日本詩歌のリズム	相良守次	52
芭蕉入門	萩原井泉水	53
朝・青く描く	前田夕暮	54
樹下石上	薄田泣菫	54
石を積む	別所梅之助	55
遊心録	堀口九萬一	55
さ・え・ら	辰野隆	55
(吉江喬松氏推薦文)		
片影	矢野峰人	58
父親としてのゲーテ	三井光彌	58
下から見た世界	ウエーケネル著 譯	59
近世時人傳	坪内逍遙	60
夜明け前	島崎藤村	60
軍記物語研究	五十嵐力	61
徳川時代の藝術と社會	阿部次郎	61
文學汎論	佐藤清	62

第八 兒童讀物

をさなものがたり	島崎藤村	63
愛國の孤兒	島村民藏	64
花の首輪	宇野浩二	64

と「幼きものに」を書いた。「幼きものに」は藤村が外國へ行つた時の話である。「ふるさと」は郷里である木曾の馬籠村にゐた子供の時分の思ひ出を書いたものだ。そしてこの本は彼が初めて東京へ出て来た時分の少年の日のこと、まだ電車も水道も電燈もなかつた頃の東京のことを書いたものだ。八十二の短い話が集めてある。そのどれもが少年の目で見たまゝに、感じたまゝに描き出されたものだ。

(昭六、四、八 研究社 四六判二二二頁 〇・七〇) 【推薦昭六、八】

愛國の孤兒

島村民藏著

愛國の孤兒は、東西諸國に事實として傳はつてゐる美談や感激すべき物語三十餘篇を集めたもので、愛國心、武士道、誠實、思慮、勤勉、勇敢、豪膽、反省、同情、孝行等、人間のあらゆる麗はしい行ひ、勇ましい働き、頭の下がるやうな振舞、感激せずにはゐられない出来事、そうした美談集である。

グリムやアンデルセンの童話を耽讀する時代が過ぎた十二三歳から十五六歳位迄の少年少女諸君の讀み物として適切である。

(昭六、六、一五 寶文館 新菊判二四〇頁 一・〇〇)

【推薦昭六、九】

花の首輪

宇野浩二著

よい創作童話の少ない今日、作家によつて書かれた本書の如きは珍らしい童話集である。最初の長篇「花の首輪」は名作「フランダースの犬」を少年少女向きにやさしく書き直されたもので、動物愛護の心を取扱つた、極めて美しい文章に綴られた一篇である。その他「さとり爺さん」「熊虎合戦」「蚊とんぼ物語」「坊ちゃん」と新聞「恵比須三郎」等十二篇は、日本ばかりでなく朝鮮や支那の話もあるといふ風に變化に富んだもので、上品な藝術味を持つた、そして教訓を施めた数々の物語であつて少年少女の讀物として適當してゐる。尙挿繪も田中良、河目悌二、耳野三郎、鍋井克之の諸氏によつて好ましい出来栄をみせてゐる。また宇野氏の童話は大人が讀んでも面白いもので、童心をとらへたよい創作童話集として此の書を推薦する所以である。

(昭六、一〇、五 大日本雄辯會講談社 四六判三四〇頁 一・三〇)

【推薦昭七、三】

索引

第一 哲學・宗教・倫理

書名	著者名	頁
プラトンとベータ	内館忠藏	1
朝永博士選集	天野貞祐	2
哲学論文集	高橋里美	2
フツセルの現象學	ヴァン・ルーン	3
聖書物語	前田晃	3
佛陀の言葉	友松圓諦	4
佛教概論	木村泰賢	4
佛教の根本思想	高橋順次郎	5
日本思想史概説	田中義能	6
古代文學に現れた日本精神	野村八良	6
やまところと神	鹿子木員信	7
獨乙精	松本義徳	7
藤樹先生の學徳	山本察常	8
新觀論語	宇野哲人	9
新觀大學・中庸	飯島忠夫	9
新觀孟子	内野臺嶺	9
支那の人文思想	中山久四郎	10
現代社會倫理學	池岡直孝	10
現代倫理學の理念	長屋喜一	11

第二 歴史・傳記・地誌・紀行

日本文化史	笹川種郎	11
天正遣歐使節記	濱田青陵	12
明治維新と現代支那	三浦周行	13
西域文明史概論	羽田亨	13
希臘史	村川堅因	13
佛蘭西史	高市慶雄	13
世界史論講	坂口昂	14
私を感激せしめた人々	田澤義輔	15
橋本左内研究	大久保龍	15
佐久間象山	象山先生遺跡表彰會編	16

父「八雲」を憶ふ 小泉一雄…16
(戸川秋骨氏推薦文)

マクドナルド	齋藤博	18
偉人群像	新渡戸稻造	18
各國國旗の由来と國祭日	内藤堯	18
近畿景觀(第二卷)	北尾鏡之助	19
歐羅巴物語	菊池重三郎	19
私の歐洲土産話	相良徳三	20
山に憩ふ	河田植	20

(田部重治氏推薦文)

峠と高原	田部重治	21
南洋へ	鳥崎新太郎	21

第三 社會・法制・經濟・教育

朝日公民讀本	朝日新聞社編	22
民法讀本	穂積重遠	23
常識としての商法改正の話	松本蒸治	23
法學挿話	勝本正晃	24
法律綱要(私法編)	廣濱嘉雄	25
大津事件顛末録	兒島惟謙	25
女性經濟知識	松村金助	26
財界の動き	服部文四郎	27
英國の危機	ジークフリード	27
ガンヂーさんの糸車	早坂二郎	27
綜合アメリカ論	金子健二	28
滿洲事變と不戰條約・國際聯盟	カイザーリンク	28
若きママさんに	室伏高信	28
	松原一雄	29
	岸邊福雄	30

(倉橋惣三氏推薦文)

幼兒の心理	丸山良二	31
桃太郎主義教育新論	巖谷小波	31
歐洲文明と教育史蹟	福島政雄	32
人間教育の最重點	松永嘉一	33
環境教育論	小川正行	33
郷土の本質と郷土教育		

昭和七年六月廿三日
昭和七年六月廿三日
發行

發行所 東京市神田區西小川町一ノ九
印刷所 東京市神田區西小川町二ノ四
發行所 東京市上野公園帝國圖書館内
代表者 矢島羊吉
日本圖書館協會調查部
日本圖書館協會調查部
電話 下谷五五七四番
電話 九段一六八五番
定價金參拾錢

讀書新報社

人生論

土田杏村著 新刊 百五十頁 定價 一圓

本書に依り須らく現代の人生觀を獲得せよ!! (五十五版)
現代日本の最大の缺陷は確固たる人生觀の指針を持たぬ事だ。古い哲學は無能となつたが、新しい社會は現代社會の史的展望を獲得しない。人生の把握、理想と體験との深い沈潜、社會的ではあるが、より深い内面的存在の嚴密なる把持、想像と體験への現實的に世界と社會との交渉をなす、さうした豊穡な現代の人生論が本書だ。

道德改造論

土田杏村著 新刊 二百四十頁 定價 一圓廿錢

道德の現社會的段階を確實に認識せよ!! (十四版)
道德の書といへば從來は賑を囀むやうな面白くないものであつたが、本書の全文は辛刺の小説よりも面白く、著者は強き叫んで意志と智性を批判し、實踐の結論を合意してつくりださうと願つてゐる。こゝに社會科學の統一を新時代の急務とする。同感の諸士に本書を寄せて、と書つてゐる。

短歌論

土田杏村著 新刊 二百四十頁 定價 一圓廿錢

急忙なる生活にふさはしき此の短歌を普及せよ!! (八版)
本書は革新短歌の理論を根本的に論じ、また日本の短歌が發生以來如何なる経過を取つて今日に達したかの歴史を叙して、短歌の本質、革新の必然性を論じたものである。自由律、現代語歌の勢力を得つてゐる折柄、短歌に關心を持たるる人々必讀の快著である。

現代哲學概論

土田杏村著 新刊 二百五十頁 定價 一圓

最も信頼出来る著漢會推薦の哲學概論!! (十七版)
現代は益々切實に哲學の一般知識を必要とするけれど、其の初めて學ぶ人に適當の書は無い事が痛感された。この要求への答として、本書は成された。主として現代の文化的、社會的、主たる關心は社會的問題が哲學的に如何に解決せらるべきかが、鮮明に叙述されてゐるのである。

現今の哲學問題

大田黒元雄著 新刊 三百四十頁 定價 二圓

繪て解説する最も平易な音樂知識の壓縮本!! (六版)
この書は哲學に興味を持つ一般人のために、現今の哲學問題、學問と自由精神、科學との關係、自然科學と精神科學、生活と哲學等にわたつて極めて要領を差した近頃の快著で、ウイソール、コルパンドの論理主義とグントの心理主義の相の先驗的觀念論を経て、フツサールの現象學に及ぶ現代哲學の批判である。

西洋音樂物語

大田黒元雄著 新刊 三百四十頁 定價 二圓

繪て解説する最も平易な音樂知識の壓縮本!! (六版)
古代から現代迄の音樂の變遷を出来るだけ平易に書いてあり、特に古代と中世を簡略にし近世音樂に就て多く述べてゐる。一般音樂書の無味乾燥な論述を避けて物語風に音樂史と樂典と名曲等の解説をなしつゝ、重要な點は洩さず頭に入りやすく書かれてゐる。眞に好樂家待望の名著である。

◆ ◆ ◆ ◆
 ！へ架書の年少青

歐羅巴物語

菊池重三郎先生著
 定價一圓五十錢
 送料十錢
 歐羅巴の大自然、外國人の無邪氣さを描いた美しい讀物集です。著者自身撮影にかゝる稀らしい寫真多數を挿み装幀亦清新、學生讀物として無比の著！

ケ十二月 星座巡禮

野尻抱影先生著
 定價一圓五十錢
 送料十錢
 毎月の星座、一々の星名と之に連なる神話傳説と散文詩を配した独自の天文入門書である。著者は隨筆考證にラヂオ講演に天文ファンを多く持つ文學者

をさなものがたり

島崎藤村先生著
 定價一圓五十錢
 送料十錢
 藤村先生が信濃の山奥から東京へ出て生ひ立たれた少年時代の思出を滋味濃かな筆に描かれた美しい藝術讀本です。少年少女の書架にかゝせぬ名著！

藤村女子讀本

島崎藤村先生原作
 山崎斌先生編

若き女性の魂の饅頭！

本讀本は藤村先生の詩、隨筆、小説の中より、來る可き時代の女性に對する熱い關心に成る各數十篇を選び、高女學年別に編んだものです。一年から五年に至る各程度に應じて、正しい智慧を得せしめ、清い情操と健全な思索とを培はうとする文豪の思ひやりは、美しい詩に、流麗な隨筆になつて全巻にみち溢れてゐます。徒らに理智的のみ冷かになりつゝある現代に吹く優しい春風のたよりです。全國高女の最善なる副讀本、及び良家庭諸嬢の無二の讀物として切におすゝめ致します。(内容見本、申込次第進呈)

全五卷 定價各金七拾五錢
 送料六錢
 □新四六判極美本 □各巻平均二〇〇頁

東京市麹町區富見町六丁目

研究社

振替東京 一〇六八二



富山房發行

日本圖書協會

撰定書！！

◆ ◆ ◆
 實物は全國書店にあり
 ◆ ◆ ◆

模範家庭文庫	圖書學概論	人類學上より見たる西南支那	國民西洋歷史	增補國民日本歷史
文壇諸家分擔執筆	田中敬	文學博士 鳥居龍藏	柴田親雄	文學士 高橋俊乘
各二圓八十錢	四圓	四圓五十錢	三圓	三圓二十錢
各・三三	・三三	・三三	・二一	・三三

富山房

東京神田 振替東京 五〇一番

●教育に關する人の羅針盤である

東京帝國大學教授 澤入宗壽先生著 完

澤入 教育辭典



內容 呈進 本見容内
 教育に關するあらゆる事項は本書によつて教育學、教育史、教育哲學、學校教育、新學、新學校、戰後各國の新制度に關する知識を網羅すると共に哲學、哲學史、社會學、心理學、倫理學、倫理學の各學科の最新學問の進歩を、宗教、宗敎史、社會一般の諸學として、是非一冊に備へなければならぬ辭典である。

圖書館必備

定價-7.00
 全頁壹五〇〇頁
 插繪豐富木版寫真版
 號組印樹極鮮明
 送料二十四錢

會究研育教

四六判背革特製
 定價金七十四圓
 送料金二十四圓

振替東京電話九段一八五番
 東京・麴町・富士見番七二七

◇圖書館必備の良書!! 萬民必讀の名著◇

文學博士 木村泰賢著 佛敎概論 一・五〇	文學博士 友松圓諦著 佛陀の言葉 〇・六〇	東京帝國大學助敎授文學士 増田惟茂著 心理學概論 二・〇〇	東京帝國大學敎授文學博士 吉田靜致著 倫理學概論講義 二・二〇	日本大學敎授文學士 伊藤千眞三著 國民道德原論 一・六〇	松江高等學校長 文學士 菰田萬一郎著 實業道德 二・五〇	松江高等學校長 文學士 菰田萬一郎著 社會問題的倫理的批判 三・〇〇	駒澤大學敎授文學士 馬場文翁著 倫理學講話 一・八〇	田制佐重著 教育社會學の思潮 五・〇〇
文學博士 小柳司氣太著 老莊哲學 二・〇〇	大東文化學院敎授文學士 見尾勝馬著 王陽明の哲學 一・六〇	文學博士 秋月胤繼著 元明時代の儒敎 二・二〇	文學士 高見澤榮壽譯 ベネデクト・ヘーゲル哲學批判 二・二〇	文學士 齋藤龍太郎著 ニイチエ哲學の本質 二・八〇	東京帝國大學助敎授文學博士 入澤宗壽著 教育學概論 新刊 二・二〇	文學士 高見澤榮壽著 西洋哲學史講話 四・五〇	文學士 安島健著 集約論理學 二・五〇	文學士 川村悅麿著 萬葉集傳説歌考 五・四〇

東京市赤坂區青山 甲子社書房 東京市赤坂區口座 九三〇〇五番

第二高校教授 大石喬 一著 定價七十錢 送料八錢

最も解り易い **受験代數學の根柢**

松山高校教授 橋本吉郎著 定價八十錢 送料八錢

最も解り易い **受験物理學の根柢**

第二高校教授 大石喬 一著 定價八十錢 送料八錢

最も解り易い **受験幾何學の根柢**

北藤莊一著 定價八十錢 送料八錢

最も解り易い **三、四年の英文法**

石原坦著 定價八十錢 送料八錢

口語 **受験模範作文**

監田荒次郎著 定價壹圓 送料八錢

最も解り易い **受験國文解釋の根柢**

益木重雄著 定價八十錢 送料八錢

英語 **聽取書取の急所**

監田荒次郎著 定價壹圓 送料八錢

最も解り易い **受験漢文解釋の根柢**

ドクトル・オブ サイエンス 井口泰久著

工業數學便覽

定價二圓 送料十錢

從來我が國で刊行せられた數學便覽は數多あるも本書の如き工業を主とするものは一二坊間に現はれたるに過ぎず、然れども何れも時代の新運に遅れ全く其用をなさざりしなり。然るに斯學に志ざす人々はいつ如何なる場合にも間に合ふ此の種の便覽を切望して居る。本書は此の要求に應ぜんがため、一般學生並に少壯技術家の友たりかつ顧問たると同時に、また新知識の注入者たることを期し、一切の傳統を離れた特殊の編纂法により作成せり。技術者の日常は迅速簡單に理解を求めんとする場合多きを以て其の解説方法は最も効率よきものたらさるべからず故に本書は個條書及び表示式により一目瞭然たらしめたり。

發行所 東京今川路 松榮堂 振替 一〇七 東京 六四番

辰野隆著

たれさのもが氏隆野辰・威權大最の學文佛
れら執を筆に易容。筆隨の劃と學文西蘭佛
文佛。集論評筆隨きべふ云もと集全の氏ぬ
。著名の來近る贈へ方るす愛を學
兒青郷東 案圖箱・紀由政川順 幀裝
入箱・裝紙洋・列集新・頁〇五四女本
錢八一料送・圓三價定

ち・え・ら

新興佛蘭西文學

詩・小説・思想

書方草紙

アンドレ・ビイ著 草野貞之譯 定價二圓(送二四)
詩・隨筆・評論集 橫光利一著 定價二圓(送二四)
詩・隨筆・評論集 橫光利一著 定價二圓(送二四)
詩・隨筆・評論集 小林秀雄著 定價二・二〇(送二四)
詩・隨筆・評論集 青山二郎著 定價二・二〇(送二四)

文藝進呈 東京・神田・駿河臺下 振替東京一九二二 白水社

◆日本國民の是非必讀必備さるべき不朽の良書として推賞さる

類纂 **明治天皇御製全集**

巷間の類書と其撰を異にし、内容收むる歌の嚴精と、その數の多くして然も整々類別して讀者の至便を旨としたる、眞に空前の一大御製集である。 定價金貳圓五拾錢 送料金十六錢

本書全集の特色

- 一、聖影聖筆をコロタイプ版にて巻頭に奉揚す。
- 二、收むる御製宮内省本より多きこと五百餘首
- 三、從來の訛り傳へられたる御製を正し嚴査精究す。
- 四、編纂法の最も新らしく至便なること。
- 五、求むる處の御製を直に拜誦し得ること。
- 六、物名稱呼を一々歌章の上に別記したること。
- 七、便利なる索引冊餘頁を附したこと。
- 八、御製を通じて日本の國體を鮮明すべく注意類纂されたること。
- 九、本文五號活字五百一頁として誰人にも愛誦し易きこと。
- 十、約六百頁の堂々たる背皮上布表装箱入金字の堅牢美本なること。

明治天皇御製新講

四六版總布特
上美本三百五十餘頁 定價
金一圓五十錢
送料金十錢

本書は明治天皇の御製を現代生活の實踐原理として宣傳するものであり、著者の熱と信と其の力とは從來ありふれた御製講解の類とは全然趣を異にしてゐる。我等は日本を以て何處に世界ありや。日本の更生は世界の復活である。明治天皇によつて日本及日本國民性を學ばんとするものは此の二書を繕かれよ。汲んで盡きざる無限の内容は著者が多年の研究に由つて茲に新しく現代人に呼びかける。

著新大の卷壓然斷

著氏男武野星 會治明 講師

日本山岳會評議員
田部重治著

峠と高原

四六判二六〇頁 洋布裝函入
別刷寫眞一二葉
定價壹圓五拾錢 送料拾貳錢

懐しき山村、清き流れ、幽林の小徑、やがて豁然とうち展らく未知の世界、古きを振り返りつゝ新しきに入る心のときめき——峠こそ我が國土の最も美はしき詩ではあるまいか。そこには自然と人間のいとも妙な諧調がある。若むす過去がある。小笹の絨毯、萩草の露、白樺、落葉松、樺などの彩どり——高原こそは、岩にあき、密林に堪へ難くなつた人の弱き心をも慰はす慈母の胸ではなからうか。そこには、よし放牧の牛、馬は遊ばなくも、自然の牧歌がたゞよふ。著者は今この「峠」と「高原」を中心として、深き想、新しき山旅、豊かなる追憶と體驗を語る。勿論本書は、諸君の山へのあこがれに思はざりし境を加へ、或は古き地をも新たなる美を以て想起せしめるであらう。が、より貴き贈りものは、山に入る人々への心の糧である。ルツクザツクや地圖よりも前に先づ用意されねばならぬ、自然を愛し味ふ心そのものである。(文部省推薦優良圖書)

菅沼達太郎著

東京近郊の山と溪

新裝版三六〇頁 洋布裝函入
別刷寫眞三四葉 地圖四〇圖
定價壹圓五拾錢 送料拾貳錢

北は荒川の上流、西は多摩川水源の山々・大菩薩連嶺・三峠山附近、南は丹澤山塊、東は筑波・加波山までを含む。四時消えざる雪はなくも、原始を偲ぶ蒼蒼の幽林、眺望の最も手近かな公園。唯遺憾に堪へないのは、從來一定の山、一定のルートにのみ人々が集り同等に或はより以上に良い所が捨てられなかつたことである。特にこの山地の至寶とも云ふべき美しい溪谷が、それは何故か?唯知られぬ以上からである。本書はこの缺點を補はんが爲めに、出たもの項を分つこと百有餘、近郊の推賞に値する山々溪谷を説き、確にして而も山の氣分横溢せるガイドブック。

日本山岳會理事
角田吉夫著

上越國境

四六判三六〇頁 洋布裝函入
別刷寫眞三四葉 三色地圖五
定價貳圓貳拾錢 送料拾四錢

高山的山容に幽溪に、雪岩水森林草原等何れに於ても日本アルプスに匹敵し、より以上處女性を保つ上越國境山地は、上越線の全通と共に最も第一時と費用を以て、山への憧れを四季を通じて充し得る聖地となつた。其最良の伴侶こそ即ち本書である。最近の上越國境の第一行者たる著者が、自から踏査を本とし、多数の文獻と地元上越國境山脈の全部と、北は八海山、駒ヶ岳、苗場山等の貴なる登山に至る近隣の山々、東は尾瀬より西は白砂山、野反池に至る上越國境山脈の全部と、其最新の消息を傳ふ。越後方面の事や積雪期の登山に就てこの地方を評述せるは本書の一大特色。四十六圖の素晴しき寫眞は目を見張らしめ、最近の登路・山小屋等を洩れなく記載せる地圖は此地方を指す人々を裨益する所大である。

振替電 東小石川五九七 京東小石川一五二 東小石川一五二 京東小石川一五二 振替電 東小石川五九七

京東市小石川區江戶町八十
交蘭社發行
振替口座東京〇二七九番

大村書店

オレステ・ヴァカーリ氏著 (内容見本(五二頁)進呈)

英文法通論

THE BOOK THAT WILL MAKE YOU
MASTER OF ENGLISH

定價 {第一、二、三編(合本)(六二〇頁) 總クロス製 壹圓 送料(市内十二錢 地方廿一錢)
初等英文法概論(二七〇頁) 同 壹圓
▷ 練筆特製(合本) 定價四圓 ◁

◇丸善・三省堂・東京堂・大阪寶文館及各地支店◇
其の他全國一流書店にあり

英語の研究が日本に始つて以來、出版された無数の参考書中、我が「英文法通論」ほど甚大な好評を博したものはなかつた。發行後一年を経ずして既に一萬五千部の賣行を見、内外の英學者はこぞつて本書に對し讃辭を惜しまなかつた。完全な英語を最も平易な方法によつて習得せんとする學生諸氏は、一日も早く本書一冊を座右にそなへ給はんことをおすゝめする。

諸方面よりの讃辭の一斑

有名なる Outspoken Comments の著者、アマノジャク、佐藤劍之助氏評
「この英文法通論は實に驚嘆すべき書であつて日本に於ける教科書の缺點を補ひ、英語そのものに親みを起させ、……殆んど自動的に多くの努力を要せずに習得することが出来る。……この本で教へる英語はすべて“生きた”英語である。……複雑な文法規則を簡単に容易に教へてゐる、規則を記憶させるのに學生を強ひる様な傾向は全然ない。」

現シドニー大學教授、元學習院英語教授サドラー氏評
「手頃の一巻に極めて多量の説明を包含し居り、頗る實用的にして又よく系統立ちたる御著と見受けられ候。適當且つ選擇宜しき例文を以て、あらゆる方面の日常英語が巧みに説明せられ居ることは、一見直に判明可致候ことにて、日本の英學生諸君にとりて本書は有益なること、確信仕候。思ふに如何なる學習程度のものも、本書の使用によりて益する所可有之と存せられ候。」

成城高等學校教授百瀬甫氏評
「その説明の態度と方法に於て一點の曖昧の點なく、些の骨折を惜しまず、良心的態度で終始一貫してゐるのは誠に讚嘆に値することである。」

下記諸學校より本年度教科書として採用されるの榮を得
東京農業大學・目白女子大學・文化學院・札幌商業學校
長岡高等工業學校・朝倉高等女學校(福岡)・長崎中學校・YWCA英語學校

電話神田 2014 英文法通論發行所 振替東京 53569
東京市神田區小川町ビル内

國語說鈴

文學博士 吉澤義則著 定價五圓八角
増註 徒然草 諸抄 大成 校訂

詩語集成

川田 瑞穂著 定價五圓五角
橋田東聲著 定價五圓

短歌初學

尾山篤二郎著 定價五圓
短歌論攷

青年日本の歌

北原白秋著 定價五圓

本書の收むる處國語國文學の全般に亘り其研究諸論はつきせぬ興味を興をなし、全篇に亘り高雅なる著者の全風貌を彷彿せしむ。

本書は徒然草諸抄大成、光廣卿自筆本、嵯峨本、文段抄本文、弘賢本、更に現代の代表的註釋をも網羅して之を是正す。

本書は古今數千年の詩語を集め悉く平仄を付し、二字句、三字句の外に二字對三字對を併せ掲ぐ。

著者は現歌壇批評家の權威、本書はその多年の蘊蓄を傾けたる珠玉。作歌道の深奥を披瀝してゐる。

本書は懇切に簡明にあらゆる方面よりその作法を説きて順次其本質を明かにせる初學の指標として眞に其要を得たものである。

本書は國民の歌唱を念頭に置きて作した國民歌謡の我新風である。興隆せねばならぬもの。

俳芥川龍之介論

西谷碧落居著 定價五圓五角

公民教授資料

小西博士序・武用種吉著 定價四圓五角

ゲトテの思想

佐藤 明著 定價四圓五角

社會運動史

荒木閣下序・森本一雄著 定價八圓

滿蒙の認識

山崎靖純著 定價六圓

日本經濟の大轉換

山崎靖純著 定價六圓

東京市神田區立命館出版部 電話東京五七三六 振替東京二六三五

オレステ・ヴァカーリ氏著 (内容見本(五二頁)進呈)

英文法通論

THE BOOK THAT WILL MAKE YOU MASTER OF ENGLISH

定價 第一、二、三編(合本)(六二〇頁)總クロス製 參圓 市内十二錢
初等英文法概論(二七〇頁)同 壹圓 地方廿一錢
▶ 總革特製(合本)定價四圓 ◀

◇丸善・三省堂・東京堂・大阪寶文館及各地支店◇
其の他全國一流書店にあり

英語の研究が日本に始つて以來、出版された無数の參考書中、我が「英文法通論」ほど大なる好評を博したものはなかつた。發行後一年を経ずして既に一萬五千部の賣行を見、内外の英學者はこぞつて本書に對し讃辭を惜しまなかつた。完全な英語を最も平易な方法によつて習得せんとする學生諸氏は、一日も早く本書一冊を座右にそなへ給はんことをおすすめる。

諸方面よりの讚辭の一斑

有名なる Outspoken Comments の著者、アマノジャク、佐藤劍之助氏評
「この英文法通論は實に驚嘆すべき書であつて日本に於ける教科書の缺點を補ひ、英語そのものに親みを起させ、……殆んど自動的に多くの努力を要せずに習得することが出来る、……この本で教へる英語はすべて「生きた」英語である。……複雑な文法規則を簡単に容易に教へてゐて、規則を記憶させるのに學生を強ひる様な傾向は全然ない。」

現シドニー大學教授、元學習院英語教授サドラー氏評
「手頃の一巻に極めて多量の説明を包含し居り、頗る實用的にして又よく系統をたつた御著と見受けられ候。適當且つ選擇宜しき例文を以て、あらゆる方面の日常英語の巧みに説明せられ居ることは、一見直に判明可致候ことにて、日本の英學生諸君にとりて本書は有益なること、確信仕候。思ふに如何なる學習程度のものも、本書の使用によりて益する所可有之と存せられ候。」

成城高等學校教授百瀬甫氏評
「その説明の態度と方法に於て一點の曖昧の點なく、些の骨折を惜しまず、良心的態度で終始一貫してゐるのは誠に讚嘆に値することである。」

下記諸學校より本年度教科書として採用されるの榮を得
東京農業大學・日白女子大學・文化學院・札幌商業學校
長岡高等工業學校・朝倉高等女學校(福岡)・長崎中學校・YWCA英語學校

電話神田 2014 英文法通論發行所 振替東京 53569
東京市神田區小川町ビル内

文學 吉澤義則著 定價參圓八角
國語說鈴

本書の收むる處國語國文學の全般に亘り其研究諸論はつきせぬ興趣の泉をなし、全篇に亘り高雅なる著者の全風貌を彷彿せしむ。

文學 吉澤義則著 定價五圓參角
校訂 徒然草 諸抄 大成

本書は徒然草諸抄大成、光廣卿自筆本、嵯峨本、文段抄本文、弘賢本、更に現代の代表的註釋をも網羅して之を是正す。

川田 瑞穂著 定價參圓五角
詩語集成

本書は古今數千年の詩語を集め悉く平仄を付し、二字句、三字句の外に二字對三字對を併せ掲ぐ。

橋田東聲著 定價壹圓五角
短歌初學

著者は現歌壇批評家の權威、本書はその多年の蘊蓄を傾けたる珠玉。作歌道の深奥を披瀝してゐる。

尾山篤二郎著 定價壹圓
短歌論攷

本書は懇切に簡明にあらゆる方面よりその作法を説きて順次其本質を明かにせる初學の指標として眞に其要を得たものである。

北原白秋著 定價壹圓
青年日本の歌

本書は國民の歌唱を念頭に置いて作した國民歌謡の我新風である。かうしたものは民族の據頭と共に興隆せねばならぬもの。

西谷碧落居士著 定價壹圓五角
俳芥川龍之介論

文藝界の巨匠として、俳句の大家として、芥川龍之介の文學的偉業を、本書で、その全貌を、明らかにする。

小西博士序・武用種吉著 定價四圓五角
公民教授資料

公民教育の資料を、本書で、その全貌を、明らかにする。

佐藤 明著 定價壹圓八角
ゲドテの思想

思想世界に於ける、ゲドテの思想を、本書で、その全貌を、明らかにする。

エイ、シヤドウエル著 定價壹圓八角
社會運動史

社會主義の歴史を、本書で、その全貌を、明らかにする。

荒木閣下序・森本一雄著 定價八拾錢
滿蒙の認識

滿蒙の認識を、本書で、その全貌を、明らかにする。

山崎靖純著 定價六拾錢
日本經濟の大轉換

日本經濟の大轉換を、本書で、その全貌を、明らかにする。

東京市神田區立命館出版部 電話東京 六〇六五 橋東替振 二六三五

319
478

水産學全集

★卷二十全★
中本配下目

監修
理學博士 藤田經信
理學博士 田中茂穂
前水産局長 長瀬貞一
理學博士 岡村金太郎
理學博士 雨宮育作

内容見本無料送呈
▽待望され渴望され當然出づべくして未だ出でざりし水産科學の完成!!
▽最高權威者の總動員!! 水産知識の寶庫にして實際利用の新百科!!
▽海國日本の指導的文獻!! 學生・漁業家・組合・學校・圖書館必備!!

良書は實物出
て、眞價を發
輝す! 見よ此
好評此歡呼!

水産學通論	北海大學 藤田經信
魚類學	東京帝國大學 田中茂穂
浮游生物分類學	東京帝國大學 小久保清治
水産動物學	東京帝國大學 岡田彌一郎
水産植物學	東京帝國大學 殖田三郎
水産蕃殖學	北海道帝國大學 藤田經信
海洋學	水産試驗場 丸川久俊
漁船研究	水産試驗場 野島休吾
最新漁撈學	東京帝國大學 長村金太郎
水産製造學	東京帝國大學 田中耕之助
水産經濟學	水産試驗場 本村金太郎
漁業政策	東京帝國大學 蛭川虎三
漁業行政	水産試驗場 周東英雄

發行所 厚生閣
東京・麴町・下六番町
電話九段三二八機替東京五九六〇番
申込所 全國書店又は直接弊閣へ

實物は
全國各
地書店
に在り

終

